

高松市新設第二学校給食センター（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

六条下所遺跡

2020年3月

高松市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、高松市新設第二学校給食センター（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、六条下所遺跡の報告を収録した。
- 2 発掘調査地並びに調査期間、調査面積は下記のとおりである。
調査地：高松市六条町700
調査期間：平成29年8月22日～平成30年1月19日
整理期間：平成31年4月1日～令和2年3月31日
調査面積：約3,701m²
- 3 発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が実施した。
- 4 現地調査は高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員の香川将慶及び同課非常勤嘱託職員の森原奈々、三輪望が担当した。整理作業は香川・三輪が行い、報告書の原稿作成は第1章、第4章2節を香川が、それ以外は三輪が執筆し、本書の編集は香川、三輪が担当した。
- 5 本調査に関連して、以下の業務を委託発注により実施した。
遺物写真撮影　　西大寺フォト
写真測量　　株式会社イビソク
- 6 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は国土座標第IV系（世界測地系）に従った。また、図中の方位は座標北を示す。
- 7 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SH：竪穴建物跡　　SB：掘立柱建物跡　　SR：自然流路　　SD：溝　　SK：土坑　　SP：柱穴
SX：性格不明遺構
- 8 本書で使用している挿図の縮尺は図中に記した。また、写真図版の遺物の縮尺はすべて任意である。
- 9 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 発掘調査と整理作業の経過	
(調査日誌抄)	1
第3節 六条下所遺跡での文化財普及啓発について	2

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3節 六条下所遺跡の既往の調査	7

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査方法	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構・遺物	13

(1) 堅穴建物跡	13
(2) 掘立柱建物跡	16
(3) 檻列	18
(4) 自然流路	18
(5) 溝	21
(6) 土坑	28
(7) ピット	34
(8) 遺物包含層	40
(9) 性格不明遺構	42
(10) 遺構外出土遺物	42

第Ⅳ章 総括

第1節 本調査地の調査成果	44
第2節 条里地割の復元について	48

挿 図 表 目 次

第1図 調査区位置図 (S=1/2,500)	1
第2図 調査時の調査区割図	1
第3図 高松平野と遺跡の位置	3
第4図 周辺の主要遺跡分布図 (S=1/10,000)	4
第5図 既往の調査地配置図 (S=1/2,500)	7
第6図 基本層序 (S=1/40)	10
第7図 遺構配置図 (S=1/400)	11-12
第8図 SH01 出土遺物実測図	13
第9図 SH01 平・断面図	14
第10図 SB01 平・断面図、出土遺物実測図	15
第11図 SB02 平・断面図、出土遺物実測図	16
第12図 SB03, SA01, 02 平・断面図	17
第13図 SR01, SD01 平・断面図、遺物出土状況図、出土遺物実測図	19-20
第14図 SD02 ~ 05 平面図、出土遺物実測図	22
第15図 SD06, 07 平・断面図	24
第16図 SD08 ~ 10 平・断面図	25
第17図 SD11 ~ 16 平・断面図、出土遺物実測図	
出土遺物実測図	27
第18図 SK01 ~ 10 平・断面図	29
第19図 SK11 ~ 15, 18 平・断面図	30
第20図 SK16 平・断面図、出土遺物実測図	32

第21図 SK16 遺物出土状況図	33
第22図 SK17, 19 ~ 21 平・断面図、出土遺物実測図	35
第23図 SP04 ~ 32 平・断面図、出土遺物実測図	36
第24図 SP33 ~ 60 平・断面図	37
第25図 遺物包含層平・断面図	39
第26図 遺物包含層出土遺物実測図	41
第27図 SX01 平・断面図	43
第28図 遺構外出土遺物実測図	43
第29図 本調査地周辺の自然流路配置図	45
第30図 六条下所遺跡遺構変遷図	46
第31図 本調査地周辺の条里地割復元図	49

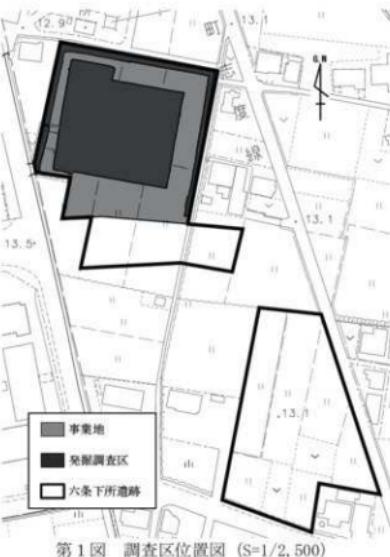
第1表 ピット観察表	50, 51
第2表 出土遺物観察表	52-54

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 発掘調査の経緯（第1図）

当事業地は本市教育委員会（以下、市教委）教育局保健体育課（以下、保健体育課）が計画する高松市新設第二学校給食センター（仮称）建設予定地である。当初は南側に計画され、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である六条下所遺跡に隣接していることから、平成25年11月5日～7日に試掘調査を行い、包蔵状況を確認したが、平成25年に試掘調査を行った事業地から今回の発掘調査地に変更となった。その後、本市文化財課が着工に先立ち平成28年1月20日～22日に東側、同年6月27日～7月2日に西側、平成29年12月21日～22日に第5調査区地点と断続的に試掘調査を実施した。その結果、いずれの試掘調査でも埋蔵文化財の包蔵状況を確認したことから、香川県教育委員会（以下、県教委）に報告し、周知の埋蔵文化財包蔵地「六条下所遺跡」の範囲変更を行った。その後、平成29年7月13日付けで文化財保護法第94条に基づく発掘通知が提出され、市教委から県教委へ進達したところ、7月19日付けで「発

掘調査」の行政指導があった。平成29年に試掘調査を実施した範囲についても、同日付で文化財保護法第94条に基づく発掘通知が提出され、市教委から県教委へ進達したところ、同日付で「発掘調査」の行政指導があった。これらを受け、文化財課は保健体育課と協議し、建物基礎部分・擁壁部分の発掘調査を実施し、記録保存を行うことで合意したため平成29年8月22日～平成30年1月19日で実施した。

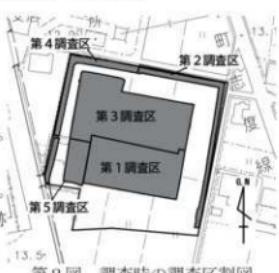


第1図 調査区位置図 (S=1/2, 500)

第2節 発掘調査と整理作業の経過（調査日誌抄）（第2図）

平成29年

- 8月22日 第1調査区重機掘削開始。
- 8月25日 重機掘削完了。竪穴建物跡、流路跡等を確認し、遺構掘削を開始。
- 10月5日 第1調査区調査完了。第2調査区重機掘削開始。
- 10月12日 第2調査区重機掘削完了。遺構掘削開始。
- 11月7日 第2調査区調査完了。第3調査区重機掘削開始。
- 11月9日 第3調査区重機掘削完了。掘立柱建物跡や溝跡等を確認し、遺構掘削を開始。



第2図 調査時の調査区割図

11月 28日 第4調査区重機掘削開始。
12月 15日 第3、4調査区調査完了。
12月 22日 第5調査区範囲の試掘調査を実施。埋蔵文化財の包蔵状況を確認。引き続き重機掘削。
12月 25日 第5調査区重機掘削完了。遺構掘削開始。
平成 30 年
1月 9 日 第5調査区調査完了。本事業地の発掘調査終了。

平成31年度より発掘調査の整理作業を開始し、遺物の洗浄や実測、写真撮影、図面整理等を行い、令和2年3月にこれらの整理作業を完了し、発掘調査報告書の刊行に至った。

第3節 六条下所遺跡での文化財普及啓発について

高松市文化財課が行う取り組みの一つとして、発掘調査の様子を市民の方々に知ってもらうため、職場体験と「親子文化財教室」を開催した。このうち親子文化財教室は高松市文化財保護協会と高松市教育委員会の共同事業である。

職場体験は、11月15日～17日に実施した。鶴尾中学校の生徒2名が遺構の掘削や機材の使い方、図面の作成等を行い、興味をもって作業を行っていた。親子文化財教室は、11月23日に実施した。小学5年生～中学3年生とその親子の計29名の参加があり、文化財課の専門職員が遺跡の説明、調査方法の指導を行った後、包含層の掘削を実施した。

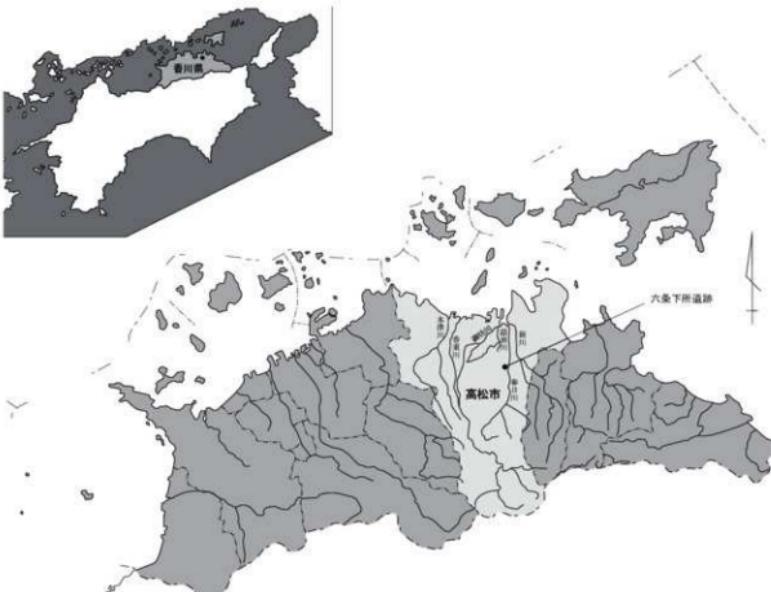
発掘体験を通じて、いずれの参加者も歴史や考古学に対して興味や関心を増進することができたと考えられる。今後も地域の歴史等を市民に伝えられる機会を設け、地域の文化財の発展に寄与できるように努めていきたい。

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

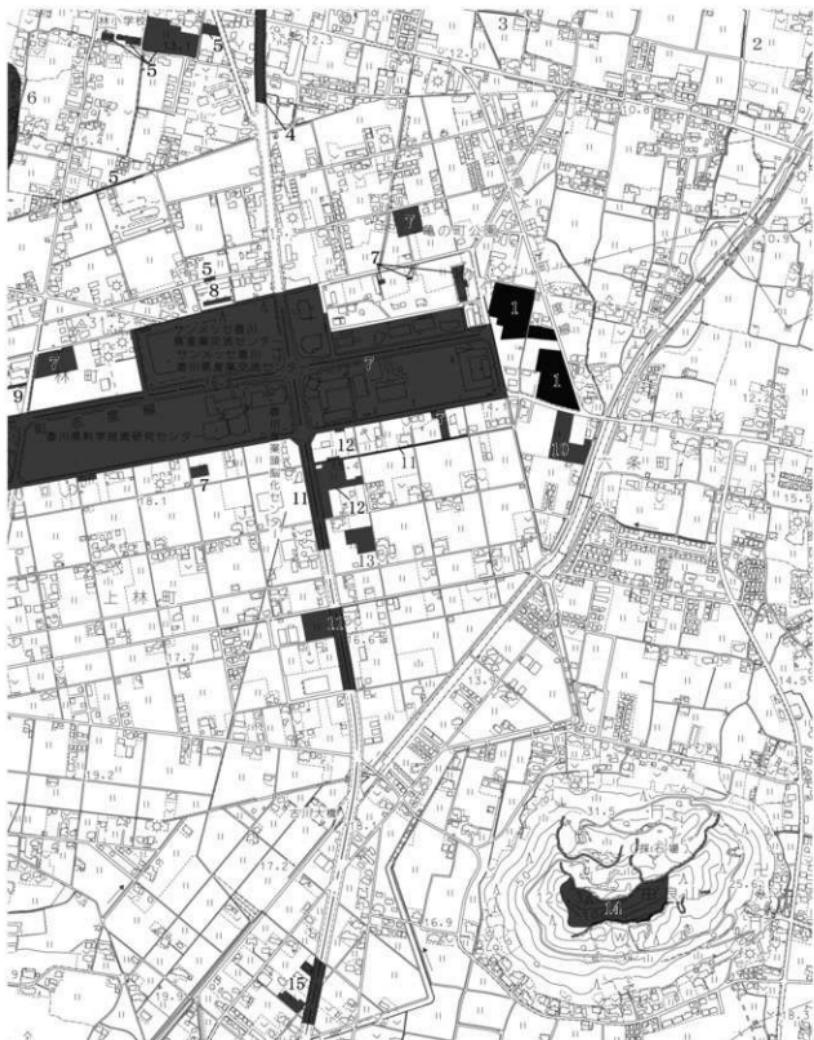
第1節 地理的環境（第3図）

高松市は香川県のほぼ中央に位置する県都である。南に阿讃山脈を隔て徳島県と接し、北は瀬戸内海を挟んで岡山県と対峙する。高松市は、東に立石山地、西は五色台、堂山山地、南は東西に走行する讃岐山脈に囲まれ、中央に東西約12km、南北約10kmの高松平野が広がっている。現在の高松市における主要な居住域となっているのがこの高松平野である。平野部には屋島や石清尾山塊、由良山等の小山塊が多数点在する。これは花崗岩の上に安山岩及び凝灰岩類が覆うことによって風化をまぬがれて形成されたもので、前者がメサ、後者がピュートと呼ばれる。高松平野の独特な景観を形作っている。高松平野は、これらの浸食が進んだら南北を流れる複数の河川堆積によって形成された沖積平野である。主要河川は東から新川、春日川、詰田川、御坊川、香東川、本津川である。中でも香東川の堆積力が最も大きく、春日川以西は香東川によって形成された扇状地であると考えられている。現在の香東川は近世初頭に生駒家の臣家西鷲八兵衛によって改修されたものであり、かつては石清尾山塊の南麓から平野中央部へ東北流する主流路が存在していた。現在では御坊川や詰田川の存在がその名残をとどめている。また、空中写真等から、林町から木太町にかけての溜池を結ぶ数本の旧河道が知られており、これまでの発掘調査でも複数の自然流路が埋没していることが明らかになっている。

高松平野は瀬戸内式気候に属し、年間降水量が1,000mm程度と非常に少ない地域である。諸河川は扇状地の中流域では伏流し、表層は涸れ川になることが多いため、水不足対策として、香東川によ



第3図 高松平野と遺跡の位置



1 : 六条下所遺跡 2 : 六条上川西遺跡 3 : 六条西村遺跡 4 : 宗高坊城遺跡 5 : 林宗高遺跡 6 : 天皇西原遺跡
 7 : 空港跡地遺跡 8 : 公務員宿舎遺跡 9 : 宮西・一角遺跡 10 : 六条上青木遺跡 11 : 上林遺跡 12 : 中林遺跡
 13 : 竹部遺跡 14 : 由良山城跡 15 : 北野遺跡

第4図 周辺の主要遺跡分布図 (S=1/10,000)

る浅い開拓谷や自然堤防を利用した溜池が築かれてきた。溜池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んであったが、昭和 50 年の香川用水の通水によってその役割を失いつつある。

六条下所遺跡は高松平野のほぼ中央に位置し、東へ約 700 m 地点に春日川が北流する。また、本遺跡の西側では、香川県教育委員会による空港跡地整備事業に伴う発掘調査が行われており（空港跡地遺跡）、比較的広い範囲で地理的及び歴史的環境が明らかになっている地域である。高松平野は高橋学によって微地形復元がされており、これによると本遺跡は香東川によって形成された扇状地の東端に位置付けられる（高橋 1992）。藏本晋司はこれを踏まえ、発掘調査によって検出された自然流路や低地部から空港跡地遺跡周辺を 5 つの微高地に大別し、各微高地の特徴をまとめている（藏本 1997）。この中で本遺跡が所在する微高地は上林遺跡付近から古川までの東西約 800 m の範囲を想定しており、「安定した広い微高地が展開する」と評価されている（藏本 1997）。しかし、空港跡地遺跡北東側に位置する I 地区や G 地区東側では、II 世紀末になるまで東端は自然流路及び溝等が検出されるのみであり、安定した広い微高地が展開しても、遺構が多く存在しない理由が別にあるものと考えられる。

引用・参考文献

高橋学 1992 「高松平野の環境復元」『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山田郡田園調査報告書』

藏本晋司 1997 「地形環境の復元」『空港跡地遺跡 II』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社

第 2 節 歴史的環境（第 4 図）

縄文時代

高松平野において当該期の遺構は少なく、自然流路から土器や木製品が出土している程度である。調査地周辺に限ると、六条下所遺跡では本調査地南側の県教委による発掘調査で自然流路から縄文時代と考えられるサヌカイトが出土している。また、宗高坊城遺跡では縄文時代晚期～弥生時代前期の自然流路から縄文土器の深鉢が出土している。

弥生時代

弥生時代前期は前時代と比べ、調査地周辺の遺跡数は飛躍的に増加する。しかし自然流路や少数の土坑、溝のみであり、竪穴建物跡等の顕著な住居遺構は確認できていない。本調査地周辺では、北側に位置する六条上川西遺跡で土坑と不明遺構が検出され、宗高坊城遺跡と空港跡地遺跡（I 地区）で自然流路や溝が検出されている程度である。本調査地では弥生時代前期後半の自然流路、遺物包含層や、自然流路に切られる竪穴建物跡を検出している。弥生時代中期は、既往の発掘調査でも言及されているが高松平野では遺跡が非常に希薄である。本調査地周辺では明確な遺構は確認できおらず、具体的な様相は不明である。

弥生時代後期に入ると遺構数が増加し、多くの遺跡で住居跡や溝が確認されるようになる。空港跡地遺跡東側では、弥生時代後期中葉に H 地区を中心として溝や基幹水路が開削され、掘立柱建物跡と竪穴建物跡からなる複数の居住域が展開する。なかには出水を利用した基幹水路も確認されており、出水付近に広がる居住域は立地環境から耕作域に関わりのある集落と推測されている（乗松 2004）。空港跡地遺跡西側では B 地区や L 地区を中心に、10 棟前後の竪穴建物跡が弥生時代後期中葉から古墳時代前期初頭まで継続する。

林宗高遺跡や上林遺跡でも弥生時代後期後半や後期末に基幹水路となる溝又は自然流路に挟まれた微高地上で居住城が確認されている。林宗高遺跡では竪穴建物跡 5 棟前後を単位とした居住城が古墳時代前期初頭まで継続する。上林遺跡では居住城が掘立柱建物跡 4 棟、竪穴建物跡 1 棟で構成され、居住城の南北は自然流路に挟まれている。居住城の北側に広がる低地部で検出された基幹水路は、木杭等による護岸施設を構築することで古墳時代前期まで維持管理されたことが判明している。この他に、公務員宿舎遺跡で竪穴建物跡が 1 棟確認されている。また、六条西村遺跡や宗高坊城遺跡、空港跡地遺跡（亀の町地区）、空港跡地遺跡（上青木地区）、六条上青木遺跡、中林遺跡等で複数の溝が検出されている。このうち宗高坊城遺跡の遺物包含層からは多数の弥生土器が出土したため、付近に集落の存在を想定できる。

以上をまとめると、弥生時代後期は低地部に基幹水路や溝からなる灌漑網が敷かれるようになり、微高地上で居住城が展開する。ただしどとんどの集落は建物跡が 2 ~ 5 棟前後からなる小規模な集落であり、比較的短期間で廃絶している。このなかで空港跡地遺跡 B 地区や L 地区周辺や林宗高遺跡は長期間継続したことからも周辺地域の中では中心的な集落であった可能性が考えられる。また、上林遺跡で検出された基幹水路は、直近に展開する居住城の存続期間よりも長期間維持されていることから、小規模集落を含む「広域な集団の関与の可能性も想定」されている（藏本 2019）。

古墳時代

古墳時代前期は弥生時代後期と比べ造構が減少し、空港跡地遺跡（亀の町地区）で土坑や溝、遺物包含層が確認される程度にとどまる。居住造構は、前述したように空港跡地遺跡 L 地区と林宗高遺跡で居住城が展開するのみである。空港跡地遺跡 L 地区周辺は 10 棟以上の竪穴建物跡や掘立柱建物が検出されている。林宗高遺跡では検出された竪穴建物跡は 2 棟と少ない。その後、古墳時代中期末に林宗高遺跡で竪穴建物跡が 1 棟検出されるが、古墳時代後期まで造構・遺物はほとんど検出されていない。古墳時代後期になると上林遺跡で再び基幹水路や溝が開削され、他に空港跡地遺跡（E 地区、亀の町地区 I）で溝や土坑が検出されている。また、宗高坊城遺跡の中世の水田層中から当該期の遺物が多数出土しているため、付近に集落の存在を想定できる。

古代

本調査地周辺では 8 世紀後半に空港跡地遺跡西側の B 地区で条里地割に沿う掘立柱建物跡や溝が検出されており、この頃から条里地割が施工されていったと考えられている。また、宗高坊城遺跡や上林遺跡で 8 世紀後半～9 世紀の条里地割に沿う溝が検出されている。10 世紀になると空港跡地遺跡東側で条里地割に沿う掘立柱建物跡と溝等が検出された。ただし、建物群は 4 棟と居住城としては小規模であり、比較的短期間で廃絶する。

中世

中世前半は、空港跡地遺跡で 11 世紀中葉から 13 世紀後葉の溝による区画をもつ建物群が展開する。中には建物規模が大きく、居館と評価される建物群が検出されている。その周辺では、区画を持たず数棟の掘立柱建物からなる小規模な建物群が 13 世紀まで散在する様相を示す。上林遺跡では 12 世紀までには北側に広がっていた低地部の埋没が進み、12 世紀前半から 14 世紀前葉まで掘立柱建物が展開するようになる。ただし、数棟からなる小規模な建物群であり、短期間で廃絶するようである。

13 世紀末～16 世紀になると、空港跡地遺跡の区画と建物群は一度廃絶したのち新たな区画と建物群が展開する。前時代とは異なり、居館の直近に建物群が集まる「集村化」が見られる（佐藤 2000）。この他に、本遺跡を始め、林宗高遺跡や上青木遺跡、六条上川西遺跡や六条西村遺跡等から条里地割に沿う溝や土坑が検出されており、県教委が調査した六条下所遺跡でも条里地割に沿う溝が

検出されている。出土遺物が少なく詳細な年代は不明であるが、少なくとも中世段階には広範囲に灌漑網が広がっていたと考えられる。ただし、中林遺跡では古代～中世に所属するものの条里地割に沿わない溝が検出されている。

近世・近代

空港跡地遺跡の東側で17世紀から18世紀前半の条里地割に沿う溝と建物群が検出されている（G、J、I地区）。また、土器が豊富に出土したため、17～18世紀の高松平野の土器編年の指標となっている。県教委が調査した六条下所遺跡からも屋敷地が検出されている。18世紀後半以降には掘立柱建物跡等の明確な建物構造は減少するものの、遺物の出土量から居住城として利用されていたことがわかつており、出土遺物の時期から近代まで継続することがわかつていている。遺構が検出できない理由としては石場建て建物に移行したためと想定されている。

その後、昭和19（1944）年に調査地周辺は旧陸軍の飛行場建設のため接收され、大規模な土地改変が行われ、終戦後は空港として利用されていた。

第3節 六条下所遺跡の既往の調査（第5図）

1. 高松市教育委員会の試掘、発掘調査

平成14年10月7日、17日に本調査地の北側で変電所および鉄塔新設工事に伴う試掘調査を行った。遺構は少なく、時期不明土坑1基、中世と思われる鋤溝、噴礫を確認したのみである。

平成25年11月5日～7日の試掘調査では、トレーンチを18ヶ所設定し、古墳時代の土坑や性格不明遺構、中世の溝、土坑、ピットを検出した。特に古墳時代の遺構もしくは堆積層は調査地の東側に広がることが明らかになった。

平成28年1月20～22日の本調査区東側の試掘調査では、3ヶ所のトレーンチを設定し、弥生時代の自然流路やピット、中世の溝やピット、土坑を検出した。この自然流路は位置関係から、後述する県教委が検出した自然流路と一連のものと考えられる。その後、平成28年6月27日～7月2日の本調査地西半分の試掘調査では、8ヶ所のトレーンチを設定し、弥生時代のピット、中世の土坑や溝を検出した。

2. 香川県教育委員会の試掘、発掘調査

本調査地南側で県道太田下町志度線整備に伴う調査である。平成26年9月17、18日に試掘調査、平成27年11月～平成28年3月にかけて発掘調査を行った。調査地以東は条里地割が良好に残っており、周知の埋蔵文化財包藏地「空港跡地遺跡」に隣接していることから、遺構の連続性が推定される場所であったため調査が行われている。

詳細は報告書が未刊であるため不明だが、概報によると、西側で遺構面を2面確認しており、第



第5図 既往の調査地配置図 (S=1/2,500)

1面で江戸時代の屋敷地が検出された。隣接する空港跡地遺跡から連続する集落遺構と考えられる。屋敷地は約25m四方の広さあり、2×6間の掘立柱建物と柵列を伴い、建物規模から有力農民層と考えられている。また、自然流路からは縄文時代のサヌカイトが出土した。この自然流路は位置関係から空港跡地遺跡のSR102に連続すると考えられている。他、古代から近世に至る複数の溝が検出されており、うち3条は条里地割に沿っている。

以上、六条下所遺跡の既往の調査結果を概観した。六条下所遺跡は中世段階まで居住遺構等の顕著な土地利用は確認できておらず、近世段階になって屋敷地が確認できるようになる。今回の調査地の試掘調査結果では、空港跡地遺跡から連続する自然流路が所在し、中世に所属する複数のピットや土坑が検出されていることから、弥生時代から古墳時代の自然流路や中世の遺構が広がっていることが予想された。

引用・参考文献

- 藏本晋司 2019「第5章まとめ」『上林遺跡』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 2000「中世林地域の村落景観」『空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会他
- 乗松真也 2004「第4章 調査の成果」『空港跡地遺跡Ⅲ 空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県埋蔵文化財センター
- 香川県教育委員会編 1992「公務員宿舎遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成3年度』香川県教育委員会
- 香川県教育委員会編 1997「四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 空港跡地遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
- 香川県教育委員会編 1998「空港跡地遺跡整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 空港跡地遺跡III』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
- 香川県教育委員会編 2000『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
- 香川県教育委員会編 2003『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 空港跡地遺跡VI』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
- 香川県教育委員会編 2004『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第8冊 空港跡地遺跡VII』香川県教育委員会・香川県土地開発公社
- 香川県埋蔵文化財センター編 2016「六条下所遺跡」『埋蔵文化財試掘調査報告 XX』平成26年度香川県内遺跡発掘調査』香川県教育委員会
- 香川県埋蔵文化財センター編 2017「六条下所遺跡」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成27年度』香川県教育委員会
- 香川県埋蔵文化財センター編 2019「上林遺跡」香川県教育委員会
- 高松市教育委員会編 1995『空港跡地遺跡(亀の町地区I)』高松市埋蔵文化財調査報告第25集
- 高松市教育委員会編 1995『空港跡地遺跡(亀の町地区II)』高松市埋蔵文化財調査報告第28集
- 高松市教育委員会編 1999『讃岐別弘福寺領の調査 II 第2次弘福寺領讃岐国山田郡田園調査報告書』高松市埋蔵文化財調査報告第37集
- 高松市教育委員会編 2000『一角遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第44集
- 高松市教育委員会編 2000『宮西・一角遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第48集
- 高松市教育委員会編 2001『宮西・一角遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第55集
- 高松市教育委員会編 2004『宗高坊城遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第68集
- 高松市教育委員会編 2004『四国横断自動車道関連特別用地対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高松市埋蔵文化財調査報

告第 74 集

高松市教育委員会編 2010『林宗高遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 127 集

高松市教育委員会編 2010『拌師庵寺』高松市埋蔵文化財調査報告第 129 集

高松市教育委員会編 2011『中林遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 133 集

高松市教育委員会編 2012『林宗高遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 142 集

高松市教育委員会編 2013『空港跡地遺跡（上青木地区）』高松市埋蔵文化財調査報告第 149 集

高松市教育委員会編 2014『林宗高遺跡－第 3 次調査－』高松市埋蔵文化財調査報告第 154 集

高松市教育委員会 2014「六条下所遺跡」『高松市内遺跡発掘調査概報－平成 25 年度国庫補助事業－』高松市埋蔵文化財調査報告

第 152 集

高松市教育委員会編 2016『空港跡地遺跡（亀の町地区 I）第 2 次調査』高松市埋蔵文化財調査報告第 171 集

高松市教育委員会編 2016『六条上青木遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 174 集

高松市教育委員会編 2017『中林遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告第 186 集

高松市教育委員会編 2018『宮西・一角遺跡（第 7 次調査）』高松市埋蔵文化財調査報告第 197 集

高松市教育委員会編 2019『林宗高遺跡（第 4 次調査）』高松市文化財調査報告第 199 集

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査方法

発掘調査の対象は、給食センターの建物基礎部分及び擁壁部分である。調査区は工程上5つに分けた(第2図)。建物部分南東側を第1調査区、擁壁部分東側を第2調査区、建物部分北東側を第3調査区、擁壁部分北西側及び建物部分北西側を第4調査区、擁壁部分南西側及び建物部分南西側を第5調査区とした。

調査方法は、遺構面までの掘削を重機で行い、その後人力で遺構検出・掘削を行った。記録に際しては4点の基準点を設定し、基準点をもとに断面図及び一部の平面図を縮尺1/20で作図した。全体の平面図の作成は株式会社イビソクに写真測量を委託した。写真撮影は35mmフィルムカメラを主に用い、モノクロ及びリバーサルフィルムで記録した。また、補助的にデジタルカメラも用いて記録を行った。

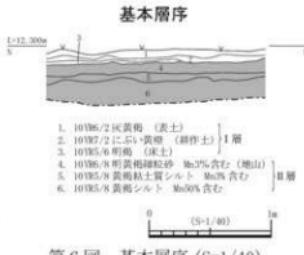
遺構番号は現地では遺構の略号を冠して、その後ろに遺構番号を付与して管理した。遺構番号は調査区ごとに通じて番号を付与した。ただし、整理作業の過程で、遺構の認識を容易にするため遺構番号を整理した。その結果、遺構番号は建物基礎部分から擁壁部分へと、全調査地を通した番号を付与している。この時、基礎部分と擁壁部分で連続する遺構は同じ遺構番号を付与した。遺構配置図では煩雑になるため、ピットのみ遺構の略号を省略している。

第2節 基本層序(第6図)

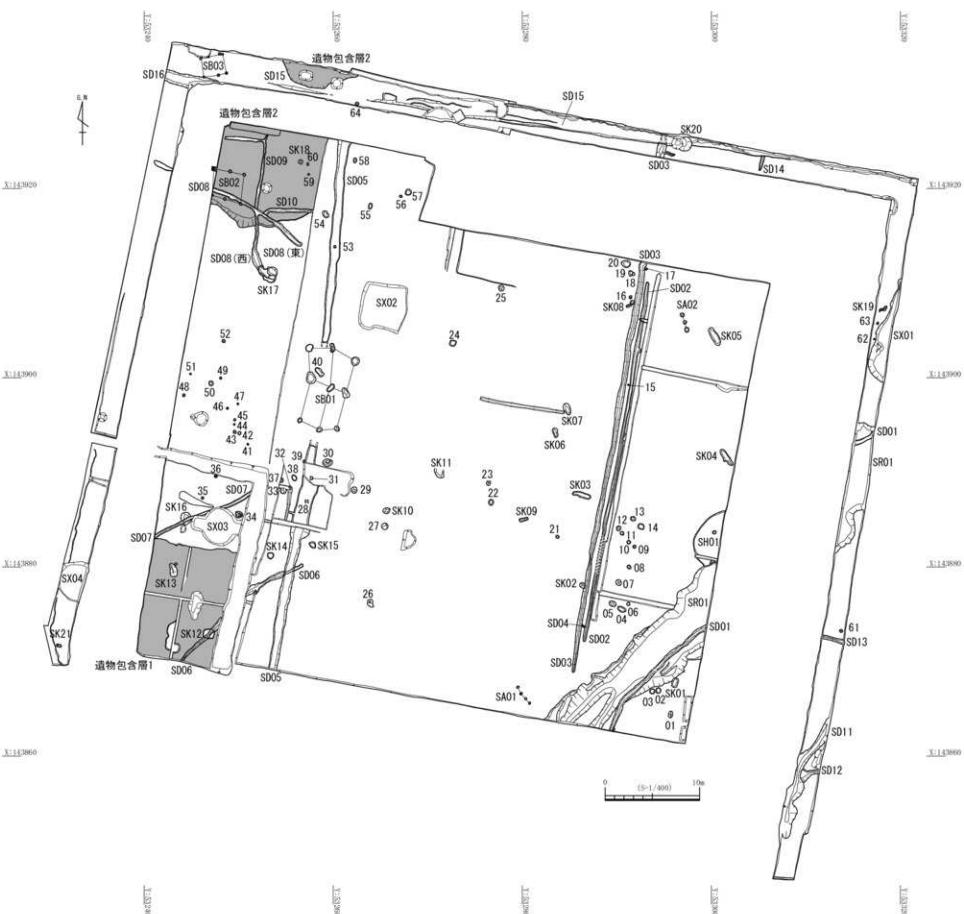
基本層序は第1調査区の南東端に位置する断ち割り部分で記録した。

当地の基本層序は大別して2層にまとめることができる。I層は耕作土及び床土で水平に堆積している。II層は地山であり、黄褐色系のシルトにマンガンを多く含む。なお、部分的な層序のため基本層序に含めていないが、調査区南西部と調査区北西部で遺物包含層を確認しており、遺構は遺物包含層上面及びII層上面で検出した。遺物包含層の詳細や出土遺物は第Ⅲ章第3節で述べる。

調査地の遺構面を詳細に見ると、調査区の全域で耕作土及び床土直下で遺構を確認している点や、第5調査区の東西方向がおよそ10mの範囲の標高が12.35~12.40m前後でそれ以外の箇所よりも10cm前後高く、加えて遺構密度も高い点から、それ以外の調査区の大部分はかなり削平を受けていると考えられる。また、局所的に確認した遺物包含層同様に、II層の上位には部分的に堆積層が見られることから、元の地形はある程度の起伏がある環境であったと考えられる。



第6図 基本層序 (S=1/40)



第7図 遺構配置図 (S=1/400)

第3節 遺構・遺物（第7図）

調査の概要

調査区は給食センターの建物基礎部分と擁壁部分からなる。基礎部分は南北約50～57m、東西約22～59mで面積は約3,100m²である。擁壁部分は幅が約2～3mで基礎部分をコの字に囲み、面積は約600m²である。検出した遺構は竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡3棟、自然流路1条、溝16条、土坑21基、ピット64基である。土坑及びピットは調査区全域で検出した。調査区東側では弥生時代前期後半の自然流路(SR01)と、SR01に切られる竪穴建物跡(SH01)を検出した。調査区西側では弥生時代前期後半の遺物包含層及び古墳時代前期後半の土坑を複数検出した。また、条里地割に沿う溝を複数検出した。遺物が出土しなかった遺構に関しては、周辺の発掘調査から、埋土の土色が黒褐色のものが弥生～古墳時代に所属し、灰褐色～にぶい黄褐色が古代、中世に所属すると考えられる。

(1) 竪穴建物跡

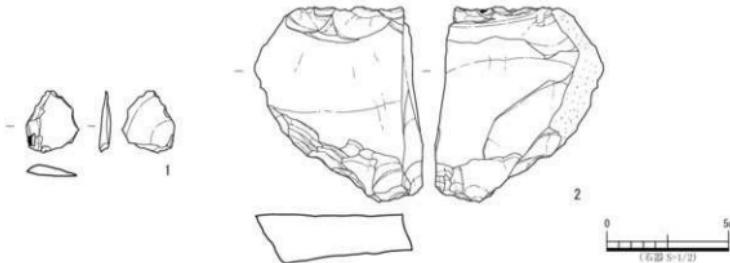
SH01(第8、9図)

第1調査区の東端で検出した竪穴建物跡である。南側は後述するSR01に切られており、東半分は調査区外へと続くが、平面形状は円形と考えられる。長軸は5.56m、短軸は残存2.75mで、検出面からの深さは0.15～0.2mである。

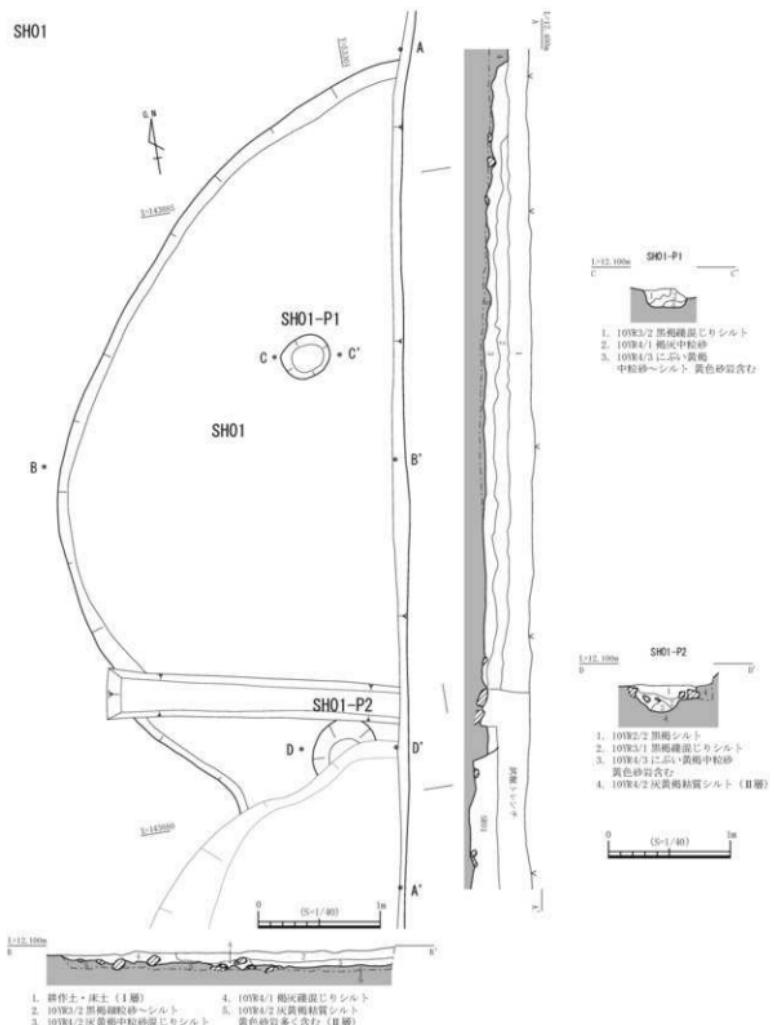
平面形状が半円を描いており、平面の規模やピットを検出したことから竪穴建物跡の可能性が高い。ただし、壁構や貼床は確認できなかった。掘方底面で0.2～0.3m程度の亜円礫が帶状に分布する状況を検出したが、断面観察からII層の一部である砂礫層が部分的に盛り上がっているものと考えられる。遺物はSH01の中央西側で石器と多数のチップが出土した。石器や多数のチップが出土したことから石器の製作を行っていたと推測される。

底面ではピットを2基検出した。SH01-P1はSH01内の北側で検出したピットである。長軸は0.4m、短軸は0.33m、検出面からの深さは0.15mである。埋土は3層からなる。遺物は出土していない。SH01-P2はSH01内の南側で検出した。南端はSR01に削平されている。長軸は0.53m、短軸は0.52m、検出面からの深さは0.14mである。埋土は3層からなる。遺物は出土していない。

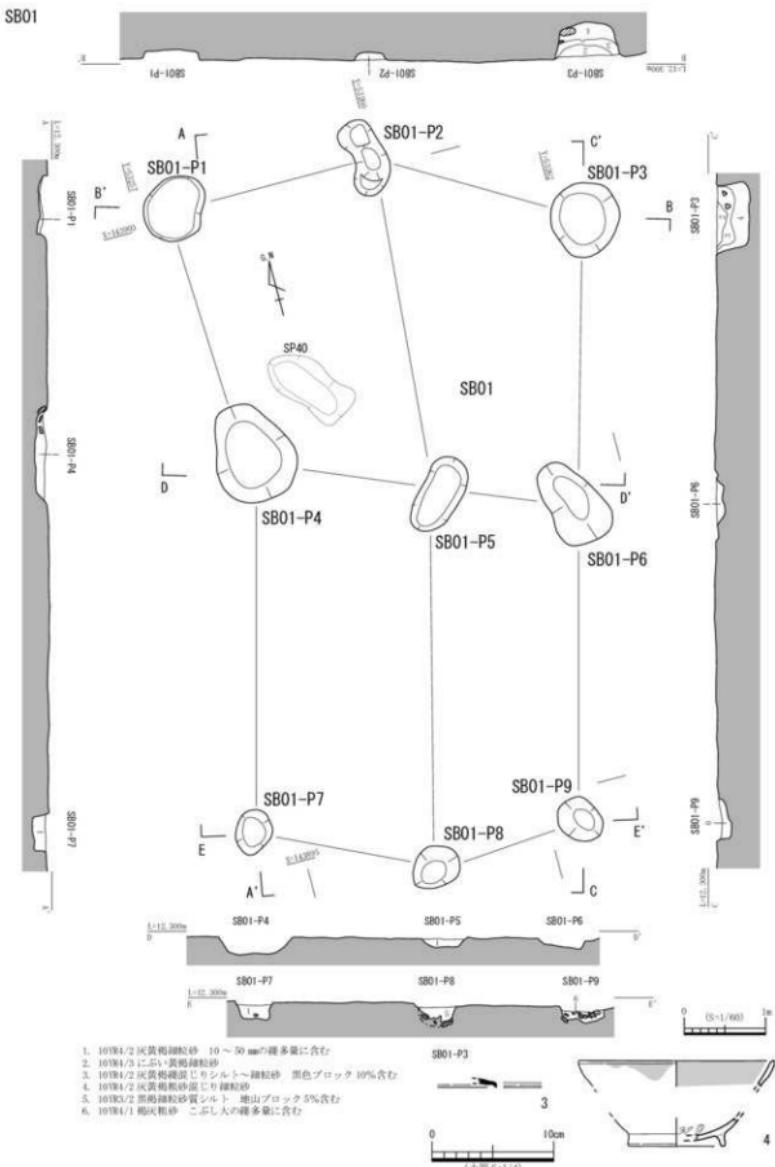
出土遺物 1は石礫未成品である。2は楔形石器である。背面の打点部分が潰れているため、両極技法の痕跡を有する。また、側面の一部に自然面を有する。



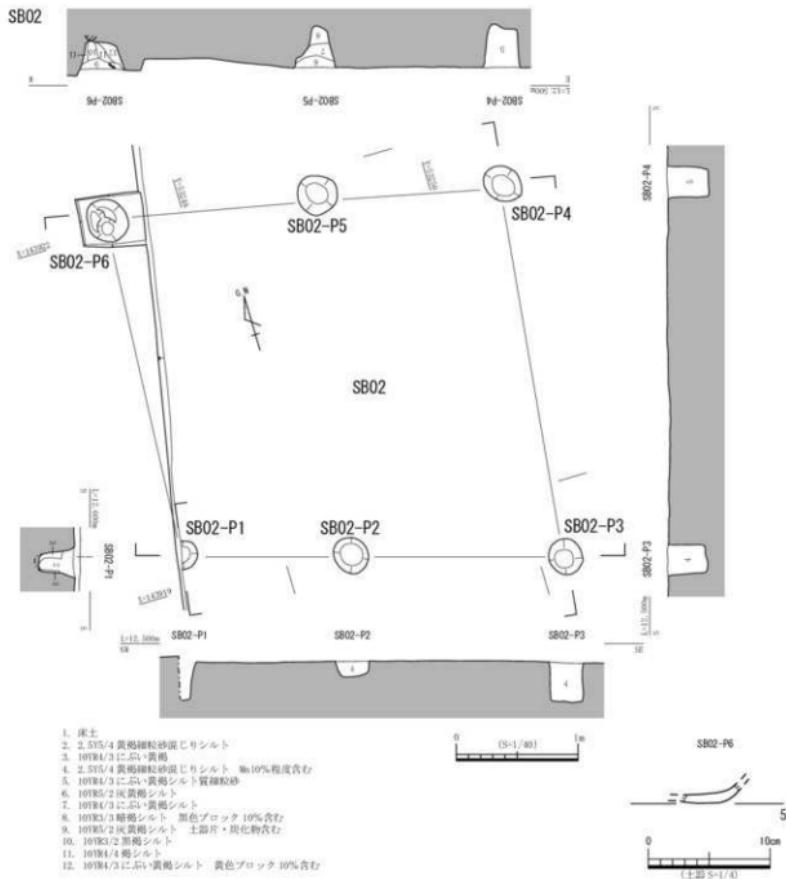
第8図 SH01出土遺物実測図



第9図 SH01平・断面図



第10図 SB01 平・断面図、出土遺物実測図



第11図 SB02 平・断面図、出土遺物実測図

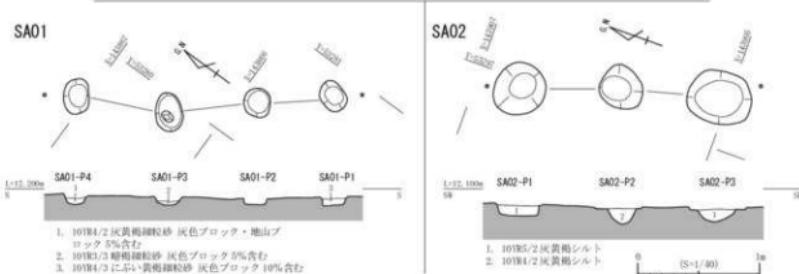
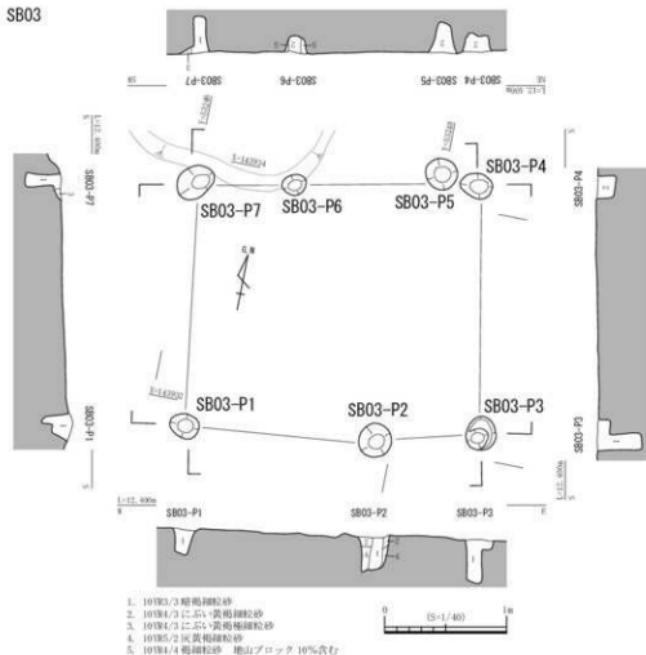
チップは40点あり、2cm未満のものが16点で総重量5.3g、2~3cmのものが17点で総重量16.8g、3~4cmのものが7点で総重量19.1gである。

所属時期 SR01に削平されているため、弥生時代前期後半以前の所産と考えられる。

(2) 挖立柱建物跡

SB01 (第10図)

第3調査区の西側で検出した。南北棟で桁行方向2間×梁行2間であり、桁行8.4m×梁行5.8mの総柱の掘立柱建物である。柱配置が同一線上に揃わず、平面形状が歪な形状となる。構成する柱穴



第12図 SB03, SA01, 02 平・断面図

の規模は直径 0.4 ~ 0.82 m、深さは 0.06 ~ 0.3 m とばらつきがある。いずれも柱痕は認められず、埋土は P 3 以外が単層であり、褐色系のシルト～細粒砂である。

出土遺物 P 3 のみ遺物が出土した。3 は須恵器の蓋の口縁部である。4 は黒色土器の楕である。小片が多く、全体の復元には至らなかったが、ほぼ一個体であると考えられる。口径 16.0 cm、底径 7.8 cm である。黒色部分は内面と口縁部外面の一節のみであり、断面が淡黄色を呈する。内面調整は摩滅が著しく、底部付近で僅かにヘラミガキを確認した程度である。

所属時期 出土状況から、4は廃絶時に破棄されたと考えられ、3は小片であるため混入品と考えられる。このため、4の黒色土器の年代から古代後半と考えられる。

SB02（第11図）

第3調査区の北西側の遺物包含層2の上面で検出した。東西棟で桁行方向2間×梁行1間であり、桁行3.36m×梁行3.57mの掘立柱建物跡である。桁行は西側の調査区外へ伸びる可能性がある。構成する柱穴の規模は直径0.23～0.34m、深さは0.12～0.35mである。埋土は黄褐色系のシルトからなる。

出土遺物 P5とP6から土師質土器片が出土したが、小片のため、図化できた遺物は1点のみである。5はP6から出土した土師質土器底部である。摩滅が激しく調整は不明瞭である。

所属時期 出土遺物の年代から中世と考えられる。

SB03（第12図）

第4調査区の北西側で検出した。東西棟で桁行2間×梁行1間であり、桁行2.68m×梁行2.45mの掘立柱建物跡である。SD16を切っている。構成する柱穴の規模は直径0.2～0.33m、深さは0.15～0.3mである。埋土は暗褐色やぶい黄褐色の細粒砂からなる。桁行の柱配置は不均一である。

所属時期 遺物が出土しておらず、重複関係から14世紀初頭以降と考えられる。

（3） 檻列

SA01（第12図）

第1調査区の南側で、後述するSR01の西側で検出した。4基のビットから構成され、主軸方位はN-36°-Wである。長さは2.33m、ビット間の距離は0.19～0.22mであり、埋土は褐色系の細粒砂からなる。構成するビットの規模は直径が0.23～0.32m、深さが0.05～0.08mと浅いことから、周辺は削平を受けている可能性が考えられる。また、P3のみ柱痕が見られる。

所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、埋土の特徴から古代～中世と考えられる。

SA02（第12図）

第3調査区の北東側で検出した。3基のビットから構成され、主軸方位はN-17°-Wである。長さは2.11m、ビット間の距離は0.33～0.41mであり、埋土は灰黄褐色シルトからなる。構成するビットの規模は直径が0.37～0.53m、深さが0.1～0.15mである。

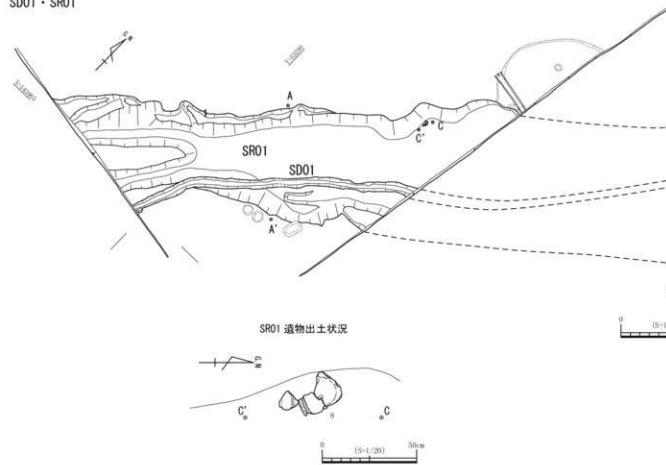
所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、埋土の特徴から古代～中世と考えられる。

（4） 自然流路

SR01（第13図）

第1調査区の東側で概ね南西から北東方向を指向する自然流路である。県教委による調査で検出された自然流路の北側の延長部分と想定される（香川県教育委員会2017）。南端では2又に分かれる形状となる。検出長は約46.8m、幅は約6.2mであり、検出面からの深さは0.39～0.62mで、断面は逆台形状を呈する。第1調査区の東壁付近でSH01を切り、SD01、SK01に切られる。SR01底面の

SD01・SR01



0
(S-1/20)
5m

SR01 遺物出土状況
C-C'
A-A'

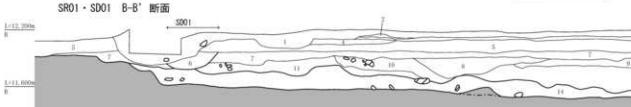
0
(S-1/20)
50cm



1. SR01/2 黒褐色細粒砂 3m 5%含む
2. SR01/2 黒褐色細粒砂 1m 10%、黑色ブロック 5%含む
3. SR01/2 黒褐色細粒砂 地山ブロック 20%含む
4. SR01/2 黒褐色細粒砂 地山ブロック 10%含む
5. SR01/2 黒褐色細粒砂 地山ブロック 10%含む
6. SR01/2 黒褐色細粒砂 (灰岩質) 地山ブロック 10%含む
7. SR01/2 黒褐色細粒砂 地山ブロック 20%、黒色ブロック 5%、ラミナ状の堆積層含む
8. SR01/2 黒褐色細粒砂 地山ブロック 20%、灰岩質ブロック 20%含む
9. SR01/2 黒褐色細粒砂 地山ブロック 20%、灰岩質ブロック 20%含む
10. SR01/2 黒褐色シルト (粘性質) 地山ブロック 5%、ラミナ状堆積層含む
11. SR01/4 黒褐色シルト 賦題地帯 (粘性質)
12. SR01/4 黒褐色シルト 地山ブロック 20%含む
13. SR01/2 黒褐色シルト・黒褐色砂 40-30%、地山含む
14. 10W01/3 黑褐色細粒砂
15. 10W01/3 黒褐色細粒砂 地山ブロック 10%含む
16. 7.5W01/4 黒褐色粘土・黒褐色シルト (粘性質) 地山ブロック 5%含む
17. 10T00/6 明黄色粘土・黒褐色シルト (粘性質) 10-70mmの繊維 30%、地山ブロック 5%含む
18. 10T00/6 明黄色粘土・黒褐色シルト (粘性質) 地山ブロック 5%含む
19. 10T00/6 黑褐色細粒砂 地山ブロック 10%含む
20. 10T00/6 黑褐色シルト (粘性質) 地山ブロック 20%含む

0
(S-1/20)
1m

SR01・SD01 B-B' 断面



1. 粘性質 1
2. 粘性質 2
3. 粘性質 3
4. 粘性質 4
5. 粘性質 5
6. SR01/2 黒褐色細粒砂 中柱砂含む (SR01 基土)
7. SR01/2 黒褐色細粒砂 地山ブロック 5%、Mg 含む
8. SR01/2 黒褐色シルト
9. 7.5W01/2 黑褐色細粒砂 地山ブロック 5%含む
10. 10W01/2 黑褐色シルト 地山ブロック 5%含む
11. 7.5W01/2 黑褐色細粒砂 (粘性質) 中柱砂含む
12. 10T00/6 黑褐色細粒砂 地山ブロック 5%含む
13. 10T00/6 黑褐色細粒砂 地山ブロック 10%含む
14. 10T00/1 黑褐色シルト (粘性質) 10-100mmの繊維 30%、地山ブロック 20%含む
15. 10T00/1 黑褐色シルト・黒褐色砂 地山ブロック 20%含む (基盤)

0
(S-1/20)
1m

第13図 SR01、SD01 平・断面図、遺物出土状況図、出土遺物実測図

19-20

標高は、SR01 南端の西側が 11.51 m、東側が 11.73 m であり、SR01 北端中央付近で 11.45 m である。このため南西から北東方向へ流下していたと考えられる。

A断面では、西側に灰褐色系細粒砂で構成される埋土を確認しており、東側では黒褐色系細粒砂～シルトで構成される埋土を確認した。このため 2 条の時期が異なる流路が重なっている状態と考えられた。重複関係は第 13 図の断面で示しているように、8 層・9 層等の灰褐色系細粒砂の流路を 6 層・7 層等の黒褐色系細粒砂～シルトの流路が切っている。A 断面は 2 つの流路の合流部近くであったことから確認できたが、合流部から離れた B 断面は東側の流路の影響が大きく、西の流路を削ったため、2 時期にわたる埋没過程を明確には確認できなかった。

出土遺物 出土遺物の多くは、A 断面から第 1 調査区東壁にかけての底面付近の細粒砂層上面（第 13 図 17 層）で出土しており、第 1 調査区南側の流路底面が 2 又に分岐している箇所や、第 2 調査区からはほぼ出土していない。また、遺物は全体的に摩滅を受けており、底部片が多く出土した。

6～13 は弥生土器壺である。6～8 は甕口縁部である。7 は口縁部直下に 3 条のヘラ描沈線を施す。8 は西肩の第 17 層でまとめて出土した土器である。第 13 図で出土状況図を作成した。口縁部直下に 4 条以上のヘラ描沈線を施す。7 はヘラ描沈線が 3 条目までの残存であるが、8 と同様に粒径の大きな長石が多数含まれ、色調が白色であることから 7 と 8 は同一個体の可能性がある。9、10 は甕体部である。10 は緩やかに湾曲しており、上部にヘラ描き沈線が 2 条残存する。11～13 は甕底部である。底径は 7.0～11.4cm である。13 は底部付近に接合痕を確認した。いずれも摩滅が激しく調整は不明瞭であったが、底部内面に指オサエを確認した。14～17 は弥生土器の壺である。14 は壺口縁部である。口縁端部が屈曲する。摩滅のため調整は不明瞭である。15～17 は壺底部である。底径は 8.4～14.5cm である。15 は底面付近のみの残存であるが、16 及び 17 は体部まで残存する。18 は弥生土器高杯の杯部である。復元口径 10.8cm であり、杯部底面に円盤充填の跡と考えられる穴が開いている。19 は体部である。僅かに弧を描く貼り付け突帯が見られる。

20～22 は石器である。20 はサヌカイト製の石鏃である。21 はサヌカイト製のスクレイバーである。22 は安山岩製の打製石斧である。厚さ 1.05cm の薄い石材を用いている。

所属時期 SR01 底面付近から甕体部に 3～4 条程度のヘラ描き沈線が施される個体が出土しており、端部のみ強く湾曲する傾向のある壺が出土していることから、弥生時代前期後半の遺構と考えられる。

（5） 溝

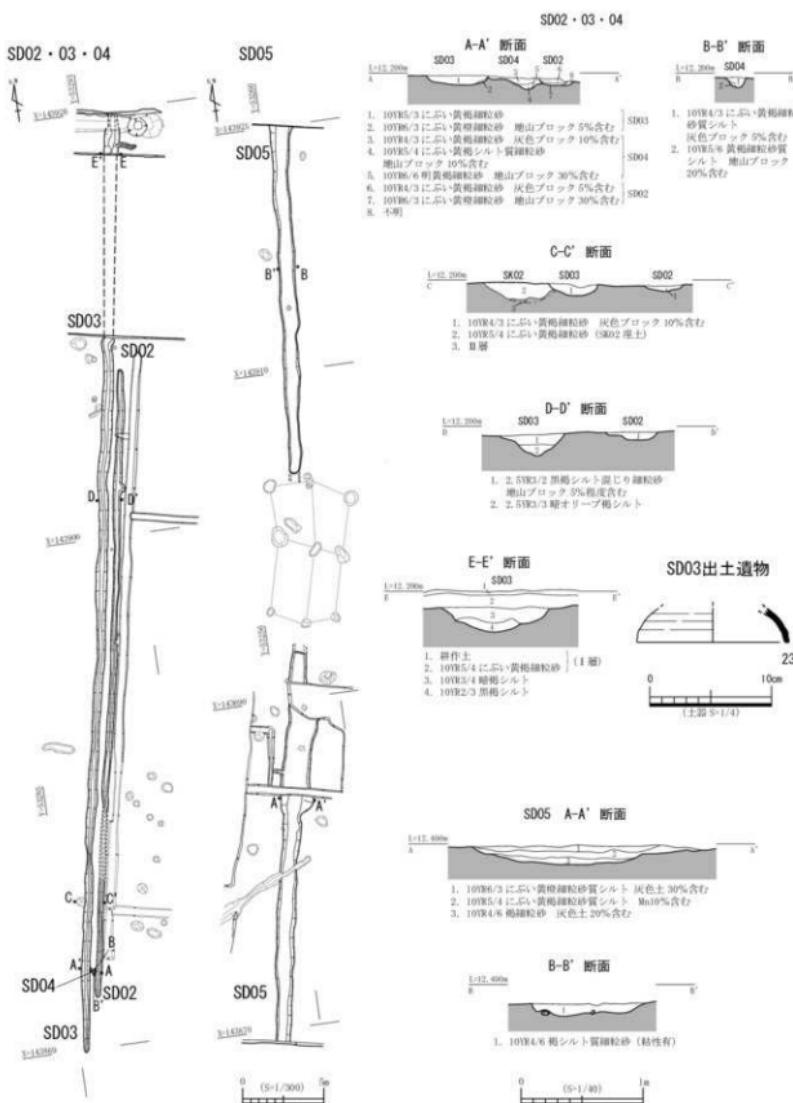
SD01（第 13 図）

第 1 調査区の東側で検出した溝である。一部 SR01 を切る。第 1 調査区の SR01 の南端では SR01 の東岸付近に位置しているが、第 2 調査区では西岸付近にあることから、蛇行する平面配置と言える。検出長は 42.0 m、幅は 0.44 m、検出面からの深さは 0.37 m である。埋土は 2 層からなり、上・下層とも灰褐色細粒砂である。

所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、SR01 の埋没後に開削されていることから弥生時代前期後半以降に形成されたと考えられる。

SD02（第 14 図）

第 1、第 3 調査区の中央東側で検出した直線的な溝である。南側で SD04 を切り、遺構の両端は SD03 ほど伸びることはなく途中で消滅する。検出長は 38.5 m、幅は 0.49 m、検出面からの深さは 0.08～0.04 m であり、非常に浅い。主軸方位は N-10°-E である。主軸方位が条里地割に沿い、周辺



第14図 SD02～05平面図、出土遺物実測図

にはSD02と同様に条里地割に沿う溝を検出していることから、何らかの区画溝と考えられる。埋土はにぶい黄褐色～黒褐色細粒砂である。

所属時期 遺物が出土しておらず詳細な年代は不明であるが、後述するSD03と遺構の規模や主軸方位などの位置関係が類似することから、同じく古代以降に所属すると考えられる。

SD03（第14図）

SD02に並行する溝である。北端でSD15に切られ、SD04とSK02を切る。検出長は57.7m、幅は0.93m、検出面からの深さは0.2～0.08mである。主軸方位はSD02とほぼ同じN-9.5°-Eである。また、溝底部の標高からは南から北へ流下していたと考えられる。SD02と同様に条里地割に沿う区画溝であったと考えられる。埋土はA断面地点ではにぶい黄褐色シルトであったが、E断面地点では黒褐色のシルトが堆積する。遺物は1点出土した。

出土遺物 23は須恵器杯蓋の口縁部である。復元口径は12.4cmで、口縁端部が僅かに内側へ屈曲する。

所属時期 出土遺物は小片であり、一点のみの出土であることから混入品の可能性がある。このため7世紀後葉以降に埋没したと考える。

SD04（第14図）

SD02、SD03に切られる溝である。検出長は0.42m、幅は0.18m、検出面からの深さは0.08mである。

所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明である。重複関係からSD02、SD03以前の所産と考えられる。

SD05（第14図）

第1、第3調査区の西側で検出した直線的な溝である。SD06、SP28、SP31、SP53を切り、一部を擾乱に削平される。検出長は56.29m、幅は1.99m、検出面からの深さは0.16mである。主軸方位はN-8°-Eであり、途中で開削方位がやや西側へ傾くものの、ほぼ条里地割に沿う溝である。北側の第4調査区では検出できなかった。SB01との重複関係は遺構が浅く検出できなかつたため不明である。溝底面の標高から、南から北へ流下していたと考えられる。SD15と同じく条里地割に沿う区画溝であったと考えられる。埋土は黄褐色系のシルト～細粒砂である。

所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、埋土の特徴や条里地割に沿うことから中世と考えられる。

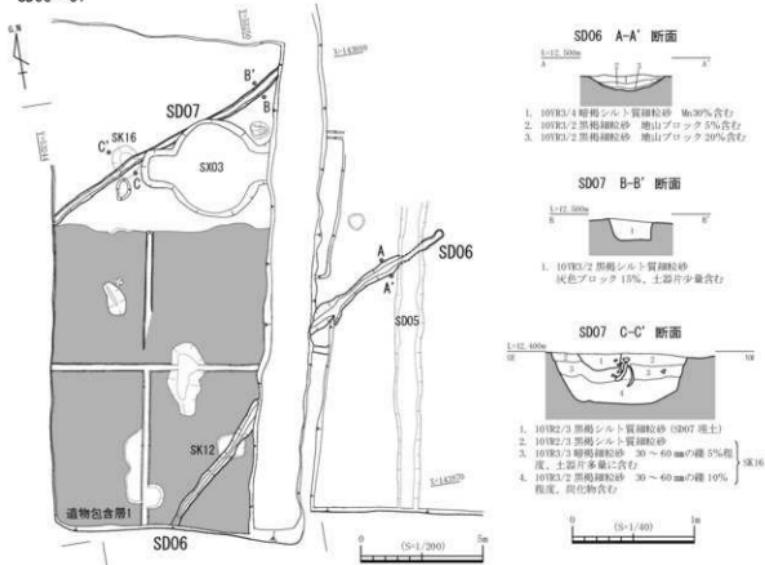
SD06（第15図）

第1、第5調査区基礎部分南西側の遺物包含層1上面で検出した溝である。SK12を切り、SD05に切られる。検出長は16.41m、幅は0.76m、検出面からの深さは0.14mである。主軸方位はN-51.5°-Eである。SD07とほぼ平行となる溝で、SD06とSD07の主軸間の距離は約12.0～9.0mである。南端は調査区外に続くが北端は検出できなかつた。埋土は3層からなりレンズ状に堆積している。

所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、埋土の特徴とSD07に平行していることから同時期と推定でき、重複関係から古墳時代前期中葉～中世と考えられる。

SD07（第15図）

SD06・07



第15図 SD06、07 平・断面図

第5調査区の西側で検出した溝である。SK16を切り、SK03に切られる。検出長は11.23 m、幅は0.39 m、検出面からの深さは0.18 mである。主軸方位はN-65.5°-Eである。南端は調査区外に続くが、西側の第4調査区では確認できず、北端も途中で途切れる。埋土は単層で、黒褐色系のシルト質細粒砂であり、断面形状は逆台形である。

所属時期 遺物が出土しておらず詳細な年代は不明であるが、埋土の特徴と条里地割に沿わないこと、古墳時代前期中葉に所属するSK16を切ることから、古墳時代前期中葉以降と考えられる。

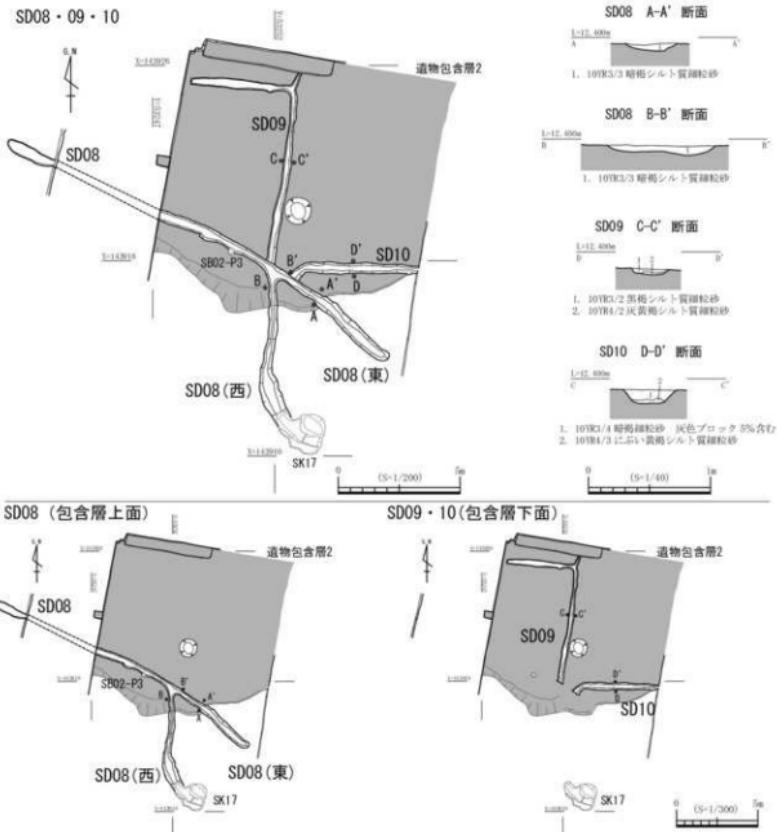
SD08 (第16図)

第3、第4調査区の北西側、遺物包含層2の上面で検出した溝である。南側は途中で分岐して2条に分かれ、その西側はSK17に切られる。また、SD09とSD10を切る。検出長は東側が17.95 m、西側が6.4 m、幅は0.86 ~ 0.57 mであり、検出面からの深さは0.07 mと浅い。主軸方位は、分岐していない箇所でN-60°-Wである。北端は擁壁部分まで続く。埋土は暗褐色シルトの単層である。

所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、埋土の特徴と重複関係(SK17)から弥生時代～古墳時代前期と考えられる。

SD09 (第16図)

第3調査区の北西側で検出した溝である。L字形を呈し、遺物包含層2の下面で検出した。前述したSD08に切られる。南北方向の検出長は7.83 m、東西方向の検出長は4.3 m、幅は0.38 m、検出



第16図 SD08～10 平・断面図

面からの深さは0.05mである。南北方向の主軸方位はN-9°-Eである。埋土は2層からなる。

所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、埋土の特徴と重複関係から弥生時代と考えられる。

SD10（第16図）

第3調査区の北西側で検出した溝である。東西方向に配置されており、SD09同様に遺物包含層2の下面で検出した。SD08に切られる。検出長は5.22m、幅は0.48m、検出面からの深さは0.11mである。主軸方位はN-89°-Eである。埋土は2層からなる。

所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、埋土の特徴と重複関係から弥生時代

と考えられる。

SD11（第17図）

第2調査区の東側で検出した溝である。南西から北東方向を向き、両端は調査区外へ続く。SD12を切る。検出長は13.56m、幅は1.14m、検出面からの深さは0.34mである。主軸方位はN-20°-Wであり、凡そSR01と平行関係にある。埋土は黒褐色系の粗砂まじりシルトである。

所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、埋土の特徴から弥生時代から古墳時代と考えられる。

SD12（第17図）

第2調査区の東側で検出した溝である。東側は調査区外へ続き、西側はSD11に切られる。検出長は2.04m、幅は1.37m、検出面からの深さは0.19mである。主軸方位はN-86°-Eでほぼ東西方向に直行する。埋土は単層であり、にぶい黄褐色のシルト混じり中粒砂からなる。

所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、重複関係から弥生時代から古墳時代と考えられる。

SD13（第17図）

第2調査区の東側で検出した溝である。両端とも調査区外へ続く。検出長は2.47m、幅は0.49mである。主軸方位はN-76°-Wである。埋土は灰色シルトの単層である。

所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、埋土の特徴から近世以降と考えられる。

SD14（第17図）

第2調査区の北側で検出した溝である。北側はSD15に切られ、南側は途中で検出されなかった。検出長は1.57m、幅は0.36m、検出面からの深さは0.06mである。主軸方位はN-14.5°-Eである。埋土は灰黄褐色細粒砂の単層である。

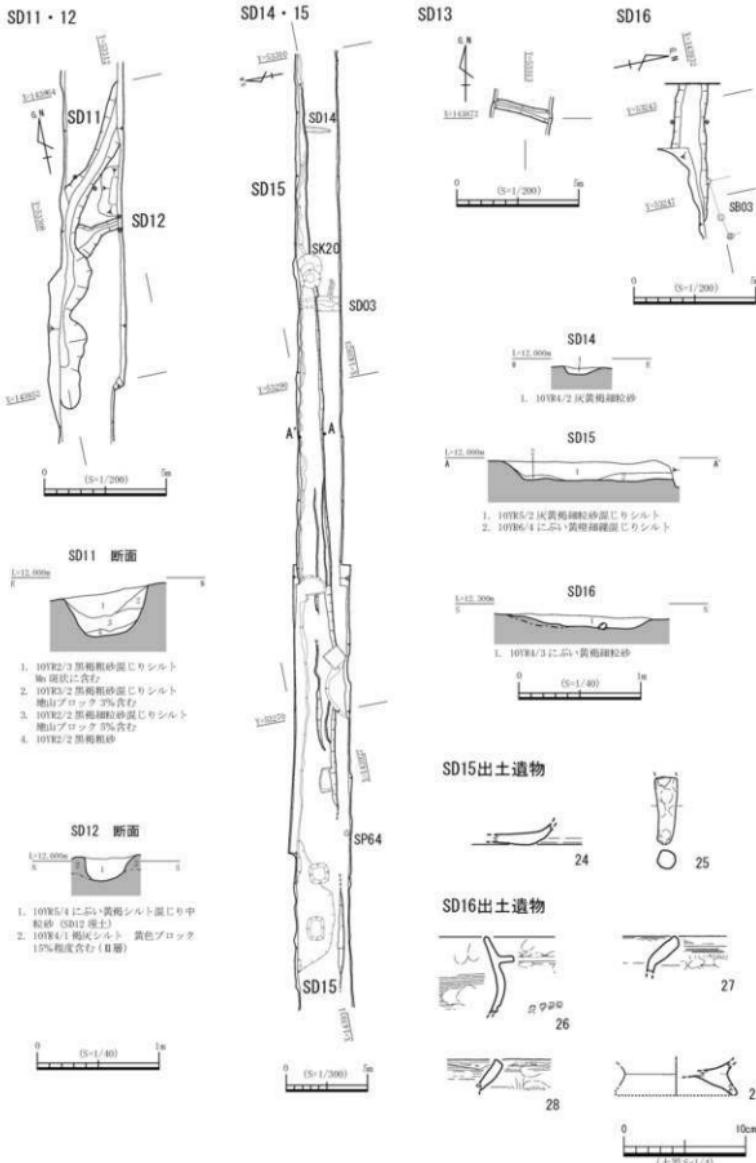
所属時期 遺物が出土しておらず、詳細な年代は不明であるが、重複関係から中世以前と考えられる。

SD15（第17図）

第2、第4調査区の北側で検出した溝である。東側は調査区外へ続き、西側は削平のため途中から検出できなかった。主に北側の肩を擾乱やSK20に削平される。また、一部は遺物包含層2の上面で検出した。検出長は55.08m、幅は2.8m以上、検出面からの深さは0.17mである。主軸方位はN-82°-Wで凡そ条里地割に沿っている。埋土は2層からなり、断面形状は逆台形を呈する。中央付近では一段底面が深くなる箇所があり、断面形状が段状になる。遺物は2点出土した。深さは浅いが、凡そ条里地割に沿い、幅が2.8m以上と規模が大きいことから条里地割の中でも大きな区画の境界溝と考えられる。

出土遺物 24は土師質器杯の底部である。全体的に摩滅が激しく、底部調整等は不明である。25は脚部片である。

所属時期 埋土の特徴と出土遺物の年代から中世と考えられる。



第17図 SD11～16平・断面図、出土遺物実測図

SD16（第17図）

第4調査区の北西側で検出した溝である。両端とも調査区外へ続き、一部SB03に切られている。検出長は5.65m、幅は1.43m、検出面からの深さは0.09mである。主軸方位はN-82°-Wで凡そ条里地割に沿っている。埋土はにぶい黄褐色細粒砂の単層である。遺物は4点出土した。

出土遺物 26～28は土師質土器の煮沸具である。26は足釜の口縁部である。口縁部は鐔部から斜め上方に伸び、端部は丸い。鐔は断面方形であり、密に指オサエが施されている。体部は鐔部の下から湾曲し、外面底部付近に格子状のタタキ、内面にヨコハケを施す。27、28は鍋口縁部である。体部を屈曲させ、口縁部を成形する。端部内外面にヨコハケを施す。29は脚部である。台付杯の脚部と考えられる。摩滅が激しく調整は不明瞭である。

所属時期 足釜の年代から、13世紀後半から14世紀初頭と考えられる。

（6） 土坑

SK01（第18図）

第1調査区の南東部分、SD01の東側で検出した土坑である。SD01を切る。平面形状は楕円形であり、長軸は1.0m、短軸は0.64m、検出面からの深さは0.08mである。埋土は灰黄褐色細粒砂と黄褐色細粒砂混じりシルトの2層からなる。遺物は出土していない。

SK02（第18図）

第1調査区の東部分、SD03の西側で検出した土坑である。東側はSD03に切られる。平面形状は楕円形であり、長軸は0.69m、短軸は0.53m、検出面からの深さは0.14mである。埋土は単層である。遺物は出土していない。

SK03（第18図）

第1調査区の中央東側、SD03の西側で検出した土坑である。平面形状は楕円形であり、長軸は1.97m、短軸は0.58m、検出面からの深さは0.16mである。埋土はにぶい黄褐色細粒砂で単層である。遺物は出土していない。

SK04（第18図）

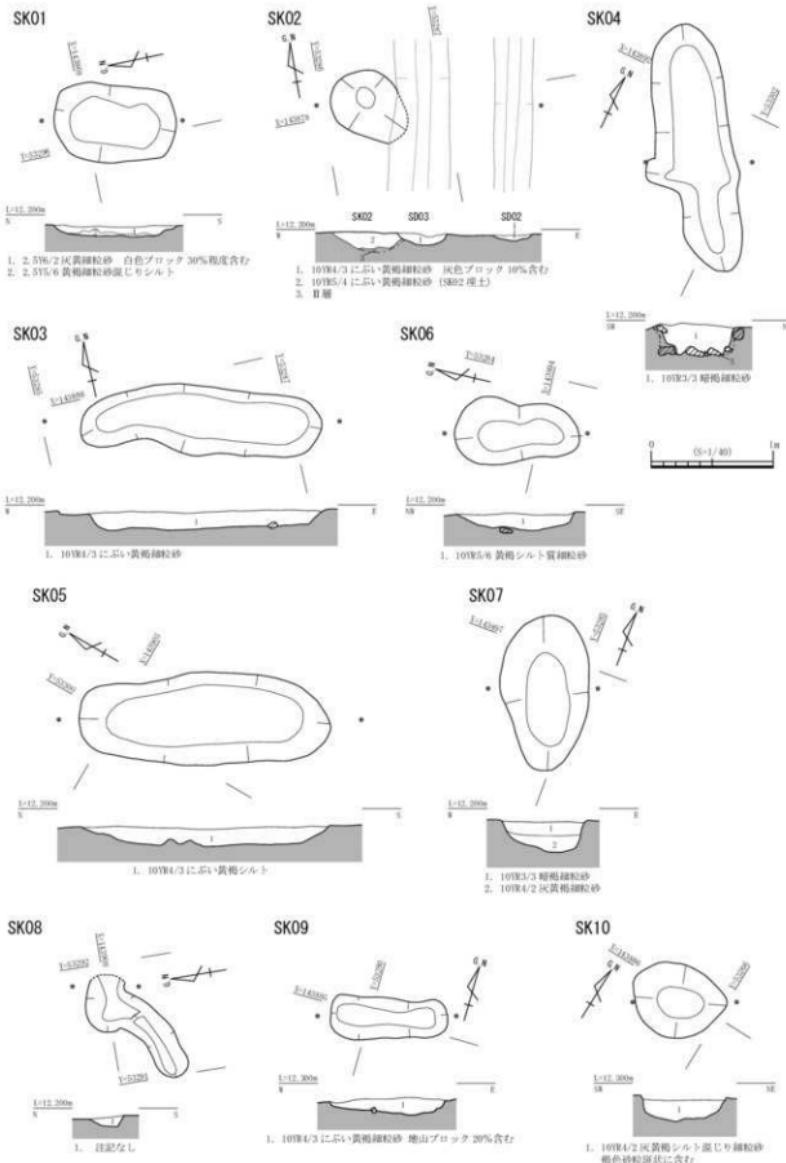
第3調査区の東端で検出した土坑である。平面形状は楕円形であり、長軸は2.05m、短軸は0.64m、検出面からの深さは0.26mである。埋土は暗褐色細粒砂で単層である。遺物は出土していない。

SK05（第18図）

第3調査区の北東側で検出した土坑である。平面形状は楕円形であり、長軸は2.06m、短軸は0.76m、検出面からの深さは0.14mである。埋土はにぶい黄褐色シルトで単層である。遺物は出土していない。

SK06（第18図）

第3調査区の中央南東側で検出した土坑である。平面形状は楕円形であり、長軸は1.02m、短軸は0.56m、検出面からの深さは0.14mである。埋土は黄褐色シルト質細粒砂で単層である。遺物は出土していない。



第18図 SK01～10 平・断面図

SK07 (第18図)

第3調査区の中央付近で検出した土坑である。平面形状は楕円形であり、長軸は1.27 m、短軸は0.73 m、検出面からの深さは0.13 mである。埋土は暗褐色細粒砂と灰黄褐色細粒砂の2層からなる。遺物は出土していない。

SK08 (第18図)

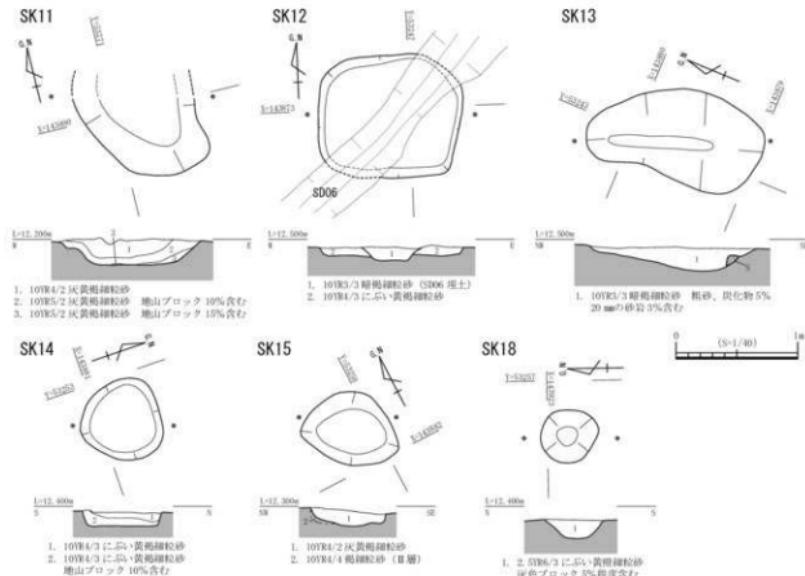
第3調査区の北側、SD03の東側で検出した土坑である。SD03に切られる。平面形状が歪であり、底面も凹凸がある。長軸は1.06 m、短軸は0.4 m、検出面からの深さは0.09 mである。遺物は出土していない。深度が浅く、不整形な土坑であるため、堆積層の一部である可能性がある。

SK09 (第18図)

第1調査区の中央やや南側で検出した土坑である。平面形状は楕円形であり、長軸は0.96 m、短軸は0.35 m、検出面からの深さは0.14 mである。埋土はにぶい黄褐色細粒砂で単層である。遺物は出土していない。

SK10 (第18図)

第1調査区の中央やや西側で検出した土坑である。平面形状は円に近い楕円形であり、長軸は0.73 m、短軸は0.61 m、検出面からの深さは0.17 mである。埋土は灰黄褐色シルト混じり細粒砂で単層である。遺物は出土していない。



第19図 SK11～15、18 平・断面図

SK11（第19図）

第1調査区の中央で検出した土坑である。平面形状は半円形であり、東西方向は残存0.84m、南北方向は残存0.7m、検出面からの深さは0.21mである。埋土は灰黄褐色細粒砂で3層からなり、レンズ状に堆積している。遺物は出土していない。北半分は調査時の調査区が異なり、明確に検出できなかった。

SK12（第19図）

第5調査区の南西側で検出した土坑である。遺物包含層1の上層で検出し、中央をSD06に切られる。平面形状は方形に近い橢円形であり、長軸は1.17m、短軸は1.01m、検出面からの深さは0.08mである。埋土はにぶい黄褐色細粒砂で単層である。遺物は出土していない。

SK13（第19図）

第5調査区の南西側で検出した土坑である。遺物包含層1上面で検出した。平面形状は橢円形であり、長軸は1.45m、短軸は0.8m、検出面からの深さは0.19mである。埋土は暗褐色細粒砂で単層である。遺物は出土していない。

SK14（第19図）

第1調査区の南西側で検出した土坑である。平面形状は円形であり、直径は0.68m、検出面からの深さは0.11mである。埋土はにぶい黄褐色細粒砂で2層からなる。遺物は出土していない。

SK15（第19図）

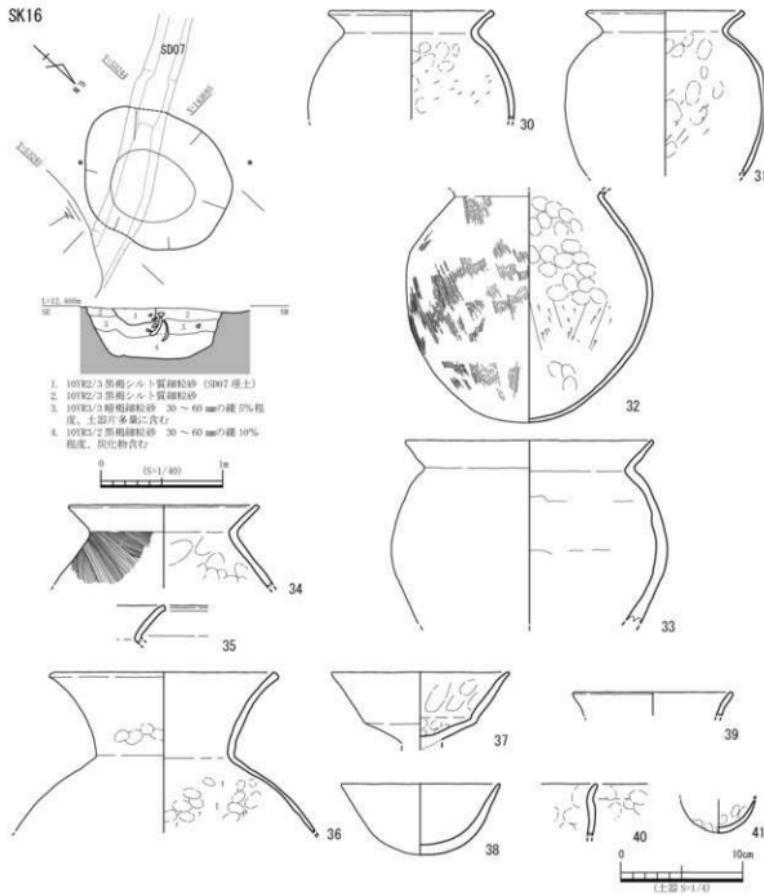
第1調査区基礎部分南西側で検出した土坑である。平面形状は橢円形であり、長軸は0.81m、短軸は0.6m、検出面からの深さは0.12mである。埋土は灰黄褐色細粒砂で単層である。遺物は出土していない。

SK16（第20、21図）

第5調査区の南西側で検出した土坑である。SD07に切られる。平面形状は円形であり、直径は1.33m、検出面からの深さは0.41mである。埋土は3層からなり、水平に堆積している。上層は黒褐色シルト質細粒砂であるが、下層の3層及び4層は細粒砂である。断面は逆台形を呈し、底面は比較的平坦である。湧水等は見られなかった。

遺物は第21図に示す通り上層から下層まで連続して出土しており、特に中央に集中していた。出土状況が良好なものが多数出土したため、遺物出土状況の記録を行った。遺物は複数個体が折り重なるように出土したことから、まとめて破棄されたものと考えられる。

出土遺物 30～34は土師器甕である。30は口縁部がくの字に外反し、口縁端部内面はナデのため窪む。端部外面はヨコナデのために面取りされる。調整は体部内面に斜方向のヘラケズリを施した後、肩部内面に指オサエを施す。外面調整は摩滅のため不明である。31は口縁部である。体部が底部付近まで残存しており、体部の張りが肩部に集中しない他、調整等は30と同様である。32は体部～底部である。埋土の3層付近で出土した。最大径は体部中央やや下であり、20.2cmである。内面調整は30、31と変わらない。外面は摩滅のためやや不明瞭であるが斜方向のハケを施している。33は胎土が非



第20図 SK16 平・断面図、出土遺物実測図

常に粗雑な甕である。口縁部はくの字に外反したのち、口縁端部はそのまま上方に伸びる。器壁が 1.1 cm と厚く、色調は橙色である。34 は甕口縁部である。胎土が精良で、内面に指オサエ、体部外面に密にハケを施す。32 と同様に肩部が膨らまない。35、36 は土師器壺口縁部である。35 は口縁端部外面に沈線を 1 条施す。36 は口縁部が緩やかに外反し、端部外面にヨコナデを施すため、端部断面は方形である。体部内面にヘラケズリのち指オサエを施し、外面頸部に指オサエを施す。37 は高杯の杯部である。内面に密に指オサエを施す。38 ~ 39 は鉢である。38 は鉢のほぼ完形品である。丸底の底部であり、口縁部が僅かに外反するが、直線的に伸びる。39 は口縁部である。途中でより外方へ

屈曲して伸びる。40は小鉢の口縁部である。内外面に施された指オサエのため歪みが激しく、口径の復元はしていない。41は小鉢底部である。底部内外面に指オサエを施す。底部は丸く整っている。

所属時期 壺は、体部の最大径が中央やや下半となり、下膨れの体部となること、口縁部が頸部から直線的に伸びる個体があることから、信里編年の壺A 6型式に比定できる。このため、出土遺物の年代から古墳時代前期中葉と考える。

SK17（第22図）

第3調査区の北西側で検出した土坑である。SD08を切る。平面形状は不整形であり、長軸は2.39m、短軸は1.72m、検出面からの深さは0.54mである。埋土は2層からなり、上下層ともこぶし大の円礫や砂岩の礫を多数含んでいた。遺構底面は平坦である。

出土遺物 42は土師器壺の体部である。頭部から体部が大きく膨らむ。内面は横方向へラケズリのち肩部に指オサエを施し、外面上には指オサエのちハケを施す。43は高杯の杯部である。脚部と体部との境に段を構成する。44は高杯脚部である。器壁が薄く最大0.4cmを測り、外面にヨコナデを施す。

45は弥生土器底部である。

所属時期 主体を占める出土遺物の年代から古墳時代前期後半と考えられる。

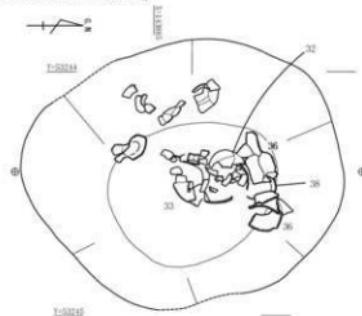
SK18（第19図）

第3調査区の北西側で検出した土坑である。遺物包含層2上面で検出した。平面形状は円形であり、長軸は0.47m、短軸は0.43m、深さは0.15mである。埋土はにぶい黄橙色細粒砂で単層である。遺物は出土していない。

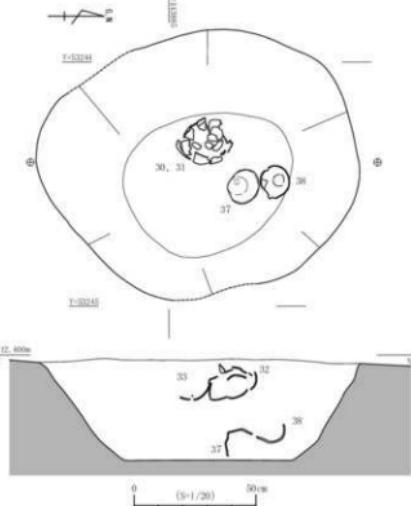
SK19（第22図）

第2調査区の東側、SX01西側で検出した土坑である。平面形状が不整形であり、深度も非常に浅い。長軸は0.99m、短軸は0.27m、検出面からの深さは0.12mである。埋土は黒褐色系の埋土である。

SK16 遺物出土状況①



SK16 遺物出土状況②



第21図 SK16 遺物出土状況図

遺物は出土していない。

SK20（第22図）

第2調査区の北側で検出した土坑である。SD15を切り、西半分を擾乱に破壊されている。平面形状は円形であり、南北方向は残存1.60m、東西方向は残存1.48m、検出面からの深さは0.68mである。埋土は灰白色系のシルトである。遺物は2点出土した。

出土遺物 46は磁器碗底部である。内外面に紋様を施し施釉する。小片のため文様は不明である。47は丸瓦片である。全体的に摩滅が激しいが、内面に布目痕を確認できる。

所属時期 詳細な時期は不明であるが、埋土と出土遺物から近現代と考えられる。

SK21（第22図）

第5調査区の南西側で検出した土坑である。平面形状は楕円形であり、検出長は0.56m、短軸は0.29m、検出面からの深さは0.26mである。埋土は暗褐色細粒砂で単層である。遺物は出土していない。

(7) ピット

調査区の全体で散漫に分布する。ここでは図化できた遺物が出土しているもの、または埋土が複層であるものを報告する。その他のピットに関しては、観察表に示している（第1表）。

SP04（第23図）

第1調査区の東側で検出したピットである。平面形状は楕円形であり、長軸は0.37m、短軸は0.21m、検出面からの深さは0.12mである。埋土はにぶい黄褐色細粒砂と灰黄褐色細粒砂の2層あり、レンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

SP05（第23図）

第1調査区の東側のSP04の西側で検出したピットである。平面形状は楕円形であり、長軸は0.31m、短軸は0.22m、検出面からの深さは0.11mである。埋土はにぶい黄褐色細粒砂と灰黄褐色細粒砂の2層あり、レンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

SP08（第23図）

第1調査区の東側で検出したピットである。平面形状は円形であり、長軸は0.45m、短軸は0.37m、検出面からの深さは0.17mである。ピット中央に柱痕を確認した。柱穴と考えられるが建物の復元はできなかった。遺物は出土していない。

SP22（第23図）

第1調査区の中央で検出したピットである。後述するSP23と規模や埋土が似る。平面形状は楕円形であり、長軸は0.63m、短軸は0.51m、深さは0.63m、検出面からの深度は0.19mである。埋土は灰黄色褐色細粒砂で2層である。遺物は出土していない。

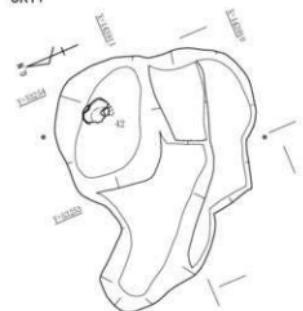
SP23（第23図）

第1調査区の中央で検出したピットである。平面形状は半円形となる。北半分は調査時の調査区が異なり、明確に検出できなかった。東西方向は残存0.42m、南北方向は残存0.33m、検出面からの深さは0.18mである。埋土は灰黄褐色細粒砂で単層である。遺物は出土していない。

SP26（第23図）

第1調査区の中央南側で検出したピットである。平面形状は一部掘りすぎたため不整形である。長軸は0.68m、短軸は0.5m、検出面からの深さは0.15mである。中央に柱痕が見られる。遺物は出

SK17

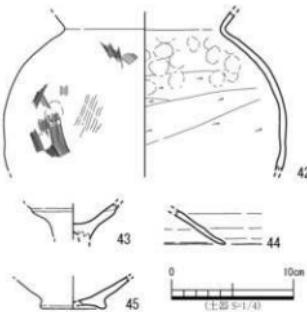


L:1:2,500

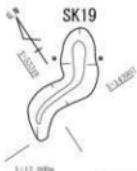


1. 10TR3/2 黒褐色細粒砂 Mn30%含む
2. 10TR3/3 細粒細粒砂 Mn5%、ふしだの磁器・土器片を多量に含む
3. 10TR4/2 灰白色シルト質粘板砂 砂岩の塊を多量・断続化を含む

0 (S=1/40) 1m



SK19



L:1:2,500m

1m

1. 黒褐色

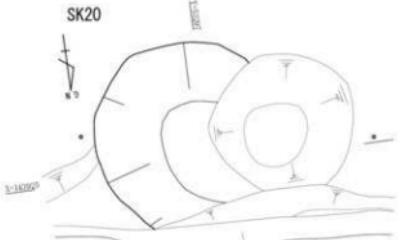


L:1:2,500m

1m

1. 10TR2/3 細粒細粒砂 黒褐色ブロック 10%、地山ブロック 5%含む

SK20



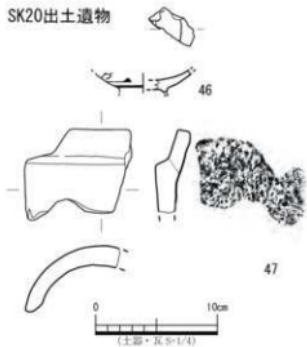
L:1:2,500m



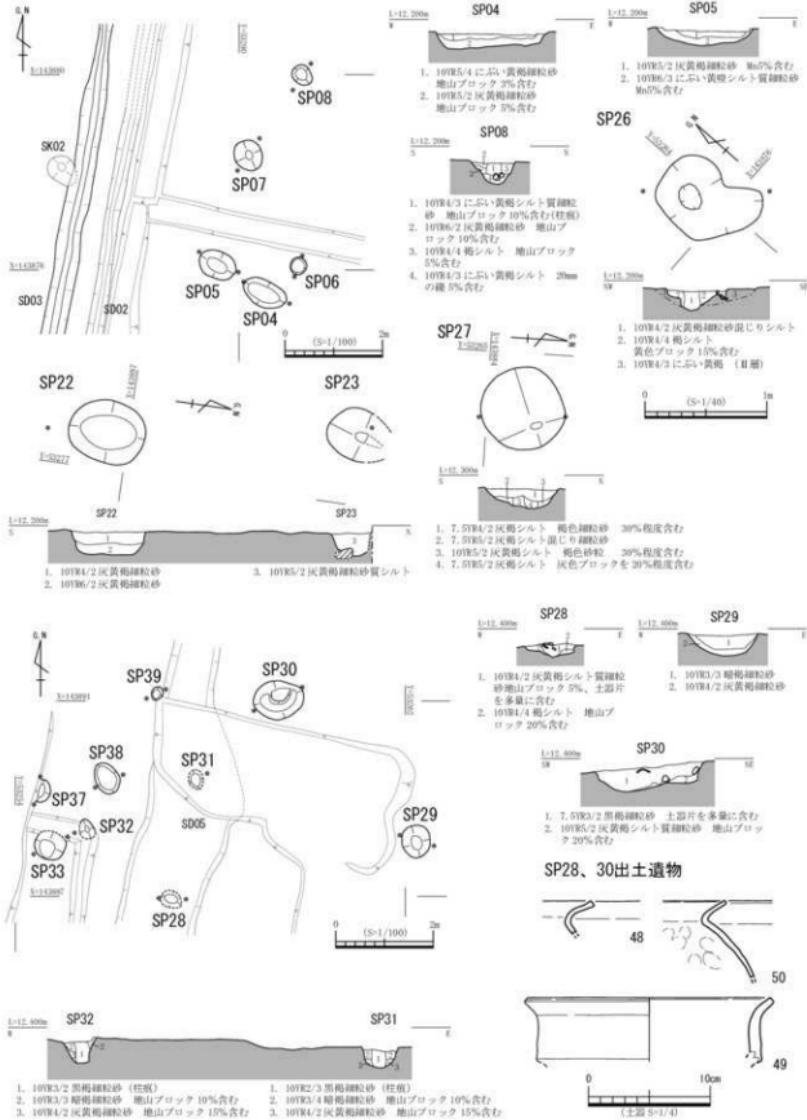
1. 2. 5Y7/1 灰白シルト調じり細粒砂 黄色ブロック 30%含む
2. 10TR7/1 灰白シルト 黄色ブロック 35%程度含む
3. B層

0 (S=1/40) 1m

SK20出土遺物



第22図 SK17、19～21平・断面図、出土遺物実測図



第23図 SP04～32平・断面図、出土遺物実測図

土していない。柱痕底面からは湧水が見られた。

SP27 (第23図)

第1調査区の中央で検出したピットである。平面形状は円形である。長軸は0.68m、短軸は0.66m、検出面からの深さは0.16mである。断面観察の結果、柱痕と考えられる。底面からは湧水が見られた。また、土器片が出土している。

SP28 (第23図)

第1調査区の西側で検出したピットである。SD05に切られる。平面形状は橢円形で長軸は0.45m、短軸は0.35m、深さは0.1mである。埋土は2層あり、1層の灰黄褐色シルト質細粒砂からは土器片が多数出土した。

出土遺物 48は土器器窓口縁部である。口縁部は頸部から屈曲したちやや伸び端部をつまみ上げる。49は土器器窓口縁部である。口縁部が途中で外反する。端部側面に沈線を施す。

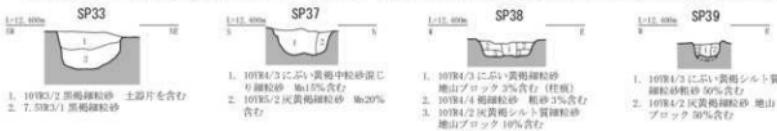
所属時期 出土遺物の年代から、古墳時代前期中葉と考えられる。

SP29 (第23図)

第1調査区の西側で検出したピットである。平面形状は円形で、長軸は0.67m、短軸は0.57m、検出面からの深さは0.16mである。埋土は2層あり、レンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

SP30 (第23図)

第1調査区の西側で検出したピットである。平面形状は橢円形で長軸は1.04m、短軸は0.81m、



第24図 SP33～60 平・断面図

検出面からの深さは0.19 mである。埋土は2層あり、1層の黒褐色細粒砂から土器片が多数出土した。

出土遺物 50は土師器壺の口縁部である。口縁部はくの字に外反し、斜め上方へ伸びる。

所属時期 出土遺物の時期から、古墳時代前期中葉と考えられる。

SP31（第23図）

第1調査区の西側で検出したピットである。SP32と対になる。擾乱とSD05に切られている。平面形状は梢円形で、長軸は0.41 m、短軸は0.3 m、検出面からの深さは0.17 mである。埋土は柱痕部分が黒褐色細粒砂である。遺物は出土していない。後述するSP32とは、規模と埋土が似ることからセット関係にあった可能性がある。

SP32（第23図）

第1調査区の西側で検出したピットである。擾乱に破壊されている。平面形状は梢円形で、長軸は0.42 m、短軸は0.31 m、検出面からの深さは0.19 mである。埋土は柱痕部分で黒褐色細粒砂である。遺物は出土していない。SP31とは、規模と埋土が似ることからセット関係にあった可能性がある。

SP33（第24図）

第1調査区の西側で検出したピットである。擾乱に破壊されている。平面形状は円形であり、長軸は0.63 m、短軸は0.58 m、検出面からの深さは0.31 mである。埋土は黒褐色細粒砂の2層であり、遺物は出土していない。

SP35（第24図）

第5調査区の西端で検出したピットである。平面形状は円形であり、長軸は0.29 m、短軸は0.26 m、検出面からの深さは0.14 mである。埋土は暗褐色細粒砂の2層あり、遺物は出土していない。

SP37（第24図）

第1調査区の西側で検出したピットである。平面形状は半円形であり、長軸は0.47 m、短軸は0.24 m、検出面からの深さは0.21 mである。埋土は黄褐色系の細粒砂2層あり、遺物は出土していない。

SP38（第24図）

第1調査区の西側で検出したピットである。平面形状は梢円形であり、長軸は0.67 m、短軸は0.47 m、検出面からの深さは0.14 mである。柱痕があり、埋土は褐色系の細粒砂である。遺物は出土していない。

SP39（第24図）

第1調査区の西側で検出したピットである。平面形状は円形で、長軸は0.29 m、短軸は0.23 m、検出面からの深さは0.13 mである。柱痕があり、埋土は褐色系の細粒砂である。遺物は出土していない。

SP50（第24図）

第3調査区の中央西端で検出したピットである。平面形状は円形であり、長軸は0.54 m、短軸は0.48 m、検出面からの深さは0.1 mである。埋土は暗褐色シルト質細粒砂とぶい黄褐色細粒砂の2層である。遺物は土器片が出土した。

SP54（第24図）

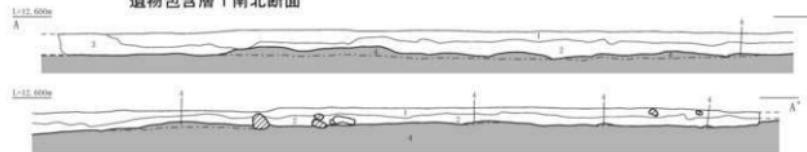
第3調査区基礎部分北西側で検出したピットである。平面形状は梢円形であり、長軸は0.8 m、短軸は0.51 m、検出面からの深さは0.2 mである。柱痕があり、埋土は暗褐色系のシルトである。遺物は土器片が出土した。

SP55（第24図）

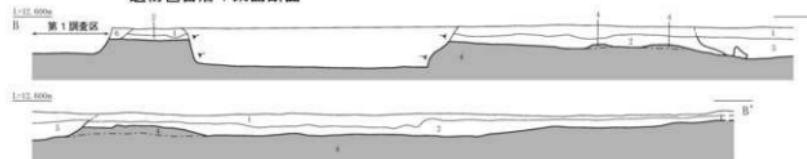
第3調査区の北西側で検出したピットである。平面形状は梢円形であり、長軸は0.64 m、短軸は0.38

遺物包含層 1

遺物包含層 1 南北断面



遺物包含層 1 東西断面



1. 10YR 1/4 黒褐色シルト質細粒砂 - Mn10%、土器多量に含む

2. 10YR 4/3 黄褐色細粒砂 - 深色ブロッカ 10%含む

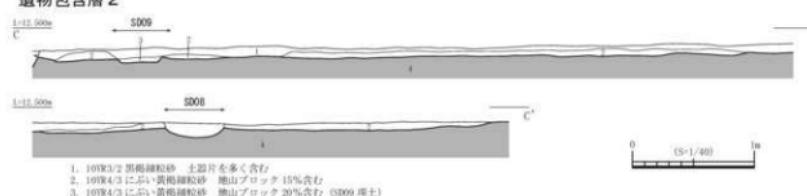
3. 10YR 3/4 にぶく 黃褐色シルト質細粒砂

4. 10YR 3/4 黄褐色細粒砂 (Ⅱ層)

5. 10YR 3/4 黄褐色細粒砂 - 土器多量に含む

6. 10YR 4/4 黄褐色シルト質細粒砂 (Ⅰ層)

遺物包含層 2

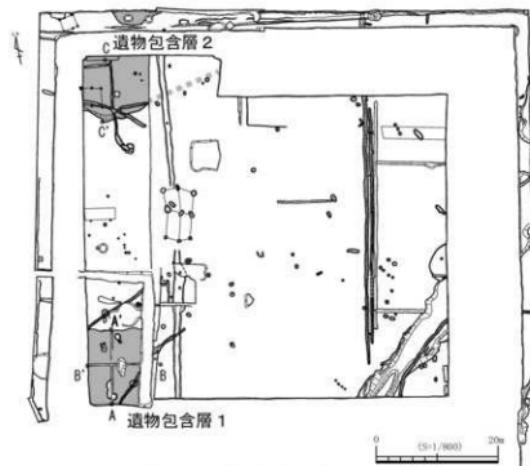


1. 10YR 3/2 黑褐色細粒砂 - 土器片多く含む

2. 10YR 4/3 にぶく 黄褐色細粒砂 - 地山ブロック 15%含む

3. 10YR 3/2 にぶく 黄褐色細粒砂 - 地山ブロック 20%含む (SD09 基土)

4. 10YR 3/4 黄褐色細粒砂 (Ⅱ層)



第 25 図 遺物包含層平・断面図

m、検出面からの深さは 0.29 m である。埋土は暗褐色シルト質細粒砂である。遺物は土器片が出土した。

SP60（第 24 図）

第 3 調査区の北西側の遺物包含層 2 で検出したピットである。平面形状は楕円形であり、長軸は 0.32 m、短軸は 0.18 m、検出面からの深さは 0.08 m である。埋土は黒褐色細粒砂である。遺物は出土していない。

（8） 遺物包含層（第 25、26 図）

遺物包含層は調査区全体には広がらず、局所的に 2 箇所で広がる様相を確認した。この 2 箇所は離れているため、第 5 調査区に広がる遺物包含層を遺物包含層 1、第 3、第 4 調査区の北西部に広がる遺物包含層を遺物包含層 2 とした。層厚は 0.2 m 以下であり、南西部では安定して層厚 0.2 ~ 0.1 m 程度で広がる。第 3 調査区北西部では最大厚 0.1 m であり、北側に向けて緩やかに層厚が増す。主に暗褐色シルト～細粒砂で構成され、上面は古墳時代以降の遺構面となる。

遺物包含層 1（第 25、26 図）

第 5 調査区の南西で検出した。層厚は 0.2 ~ 0.1 m を測り、2 層に分層でき、北に向けて層厚を減じる。第 1 層上面で SD06 や SK12、13 を検出した。遺物は第 1 層と第 5 層から多く出土した。特に 5 層は落ち込み状に広がる土層であり、遺物がまとまって出土したことから、遺構であった可能性が高い。

出土遺物 51 ~ 60 は第 1 層出土遺物であり、51 ~ 53 は弥生土器甕口縁部である。51 は端部に刻目文を施す。52 は頸部から口縁部が明瞭に屈曲する。53 は頸部に 3 条 1 束のヘラ描沈線を施す。54、55 は壺口縁部である。55 は口縁部を外方へ屈曲させ端部を丸く收める。56 は壺頸部である。内面に指オサエを施し、外面にヘラ描沈線を 4 条施す。57 は壺底部である。内外面部付近に指オサエを施す。58 は高杯の脚部である。器壁の厚さに大きな変化はなく、直線的に伸び、底部で屈曲させる。59 は蓋である。取手部分は外方へ摘まみだすような形状であり、内面に指オサエと単位不明瞭であるがヘラミガキを施す。60 はサヌカイト片のスクレイバーである。表面に細かい縦方向の傷が見られる。

61 は第 2 層出土遺物である。弥生土器甕口縁部であり、端部外面に刻目文を施し、口縁部直下に 2 条 1 束のヘラ描沈線と刻目文を施す。62 は東西ベルト中からの出土遺物である。弥生土器底部であり、中央に穿孔が見られる。

63 ~ 68 は第 5 層出土遺物である。63 ~ 65 は弥生土器甕である。63 は甕口縁部である。頸部に 4 条 1 束のヘラ描沈線を施す。64、65 は甕底部である。64 は底部に板状圧痕がある。66、67 は弥生土器壺である。66 は口縁部である。緩やかに湾曲し、口縁端部は断面方形である。67 は壺肩部である。頸部にヘラ描沈線 3 条、肩部に横方向ヘラミガキを施す。68 は弥生土器底部である。指オサエのち横方向ヘラミガキを施す。

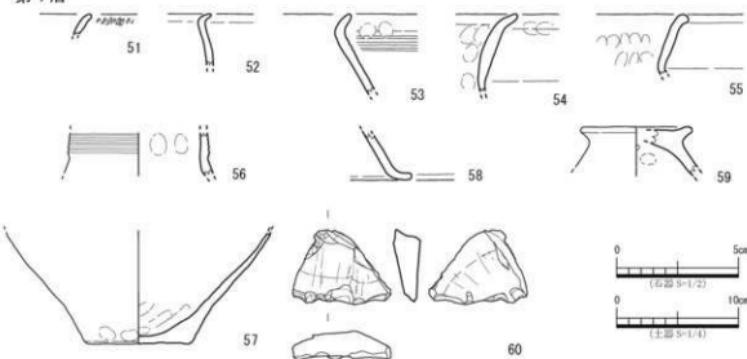
所属時期 主体を占める出土遺物から第 1 層と第 5 層は、弥生時代前期後半以降に形成されたと考えられる。第 2 層は遺物が少ないが、第 1 層と大きな時期差はないと考えられる。直近に古墳時代前期に所属する SK16 が位置することから古墳時代前期には安定化し、土地利用がされた可能性がある。

遺物包含層 2（第 25、26 図）

第 3 調査区の北西及び第 4 調査区で検出した。層厚は 0.1 ~ 0.08 m を測り、南側に向けて層厚を

包含層1出土遺物

第1層

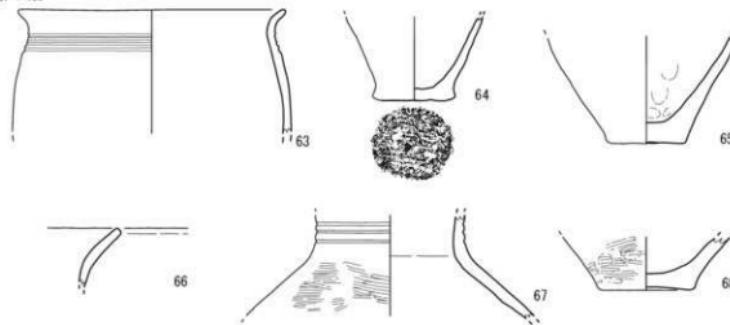


第2層

東西ベルト中



第5層



包含層2出土遺物



第26図 遺物包含層出土遺物実測図

減じる。遺物包含層下面では SD09 と SD10 を検出し、第 1 層上面で SB02 や SD08 をはじめ、多数の遺構を検出した。

出土遺物 69 は弥生土器の甕底部である。70 は磨製石斧の剥片である。表面全体に使用による摩滅が確認できる。

所属時期 遺物包含層 2 は層厚が薄かつたため、遺物の残存状況はあまり良くなく、図化できたものは少ない。出土遺物の年代から弥生時代前期に形成されたと考えられ、重複関係から古墳時代前期には安定化していたことがわかる。

(9) 性格不明遺構

SX01 (第 27 図)

第 2 調査区の東側で検出した。平面形状は半円形であり、長軸は 11.05 m、短軸は 1.88 m、検出面からの深さは 0.36 m である。埋土は黒褐色系のシルトからなり、遺物は出土していない。なだらかに立ち上がり、流水の痕は確認できないことから、自然堆積層の可能性がある。

SX02 (第 7 図)

第 3 調査区の北西で検出した。平面形状は方形であり、長軸は 5.0 m、短軸は 4.7 m、検出面からの深さは約 0.5 m である。近現代の擾乱である。湧水が多く見られた。

SX03 (第 7 図)

第 5 調査区で検出した。平面形状は円形で長軸 0.49 m、短軸 0.45 m である。近現代の擾乱である。湧水が多く見られた。

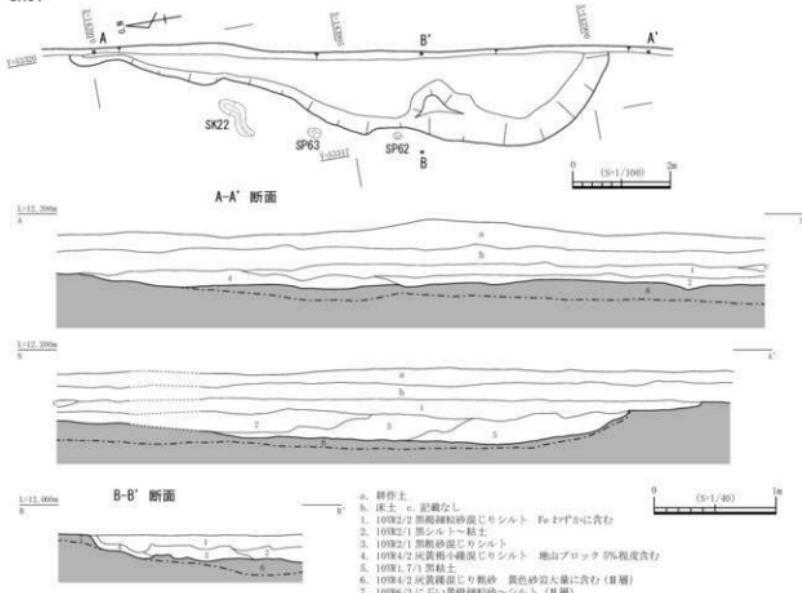
SX04 (第 7 図)

第 5 調査区の南西で検出した。平面形状は方形で長軸 44.0 m、短軸 23.0 m である。元の平面形状は円形と考えられる。近現代の擾乱である。木製の柵列と板で囲われていた。SX03 と距離が近く規模も似ているため、同様の性格を持つ建造物であった可能性がある。本調査地の西側は、戦時中に旧陸軍の飛行場が所在しており、それとの関連性が想起される。

(10) 遺構外出土遺物 (第 28 図)

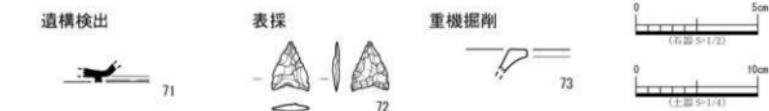
遺構検出や表採、重機掘削時に出土した遺物である。71 は須恵器杯の底部である。貼り付け高台が付く。72 は石鏃である。73 は縁軸陶器である。焼成が甘く断面褐色を呈する。

SX01



第27図 SX01 平・断面図

遺構外出土遺物



第28図 遺構外出土遺物実測図

参考文献

- 佐藤竜馬 1995 「第2節 楠井産土器の編年」『国分寺楠井遺跡』瀬戸内海埋蔵文化財調査センター
- 信里芳紀 2002 「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相」『第16回古代学協会四国支部研究大会 弥生時代前期・中期初頭の動態—研究発表要旨集—』
- 信里芳紀 2014 「讃岐地域における古墳時代前期の土器編年」『古式土器の編年的研究—四国島の古墳時代前期の土器様相—』四国考古学研究会

第IV章 総括

第1節 本調査地の調査成果（第29、30図）

今回の調査では、調査区全域で弥生時代から中世、近現代の遺構と遺物を検出した。以下、各時代の遺構について概観する。

弥生時代前期

検出した遺構は堅穴建物跡1棟、自然流路1条、溝2条である。本遺跡で最も古い遺構・遺物が検出できるのは弥生時代前期後半ごろである。調査区東側で弥生時代前期後半に所属する自然流路に切られている堅穴建物跡（SH01）を検出した。SH01からは所属時期を示す遺物は出土しなかつたが、両極技法の痕跡が残る楔形石器や石鏃未成品、チップが出土した。その後弥生時代前期後半に、調査区東側では自然流路（SR01）が開削され、西側では遺物包含層が形成された。なお、遺物包含層下面で溝を2条（SD08、SD09）検出した。調査区中央付近に該当時期の遺構が検出できなかった理由としては、後世の削平により残存していない可能性が高い。

第II章2節で述べたように、事業地周辺では弥生時代前期の遺構は自然流路が検出された程度である。この自然流路は本調査地でSR01に連続するため、既往の発掘調査結果からSR01上流部分の調査成果を整理する。

空港跡地遺跡（上青木地区）NR01

検出地点は周辺よりも低い低地部にある。平面検出と断ち割り調査のみであり、完掘はしていない。幅は8.8m、検出面からの深度は0.74mである。遺物は出土していないが、埋没後に開掘されたSD01とSD03は弥生時代後期～古墳時代前期に帰属するため、当該期には埋没していたと考えられる。

空港跡地遺跡（I地区）SR102

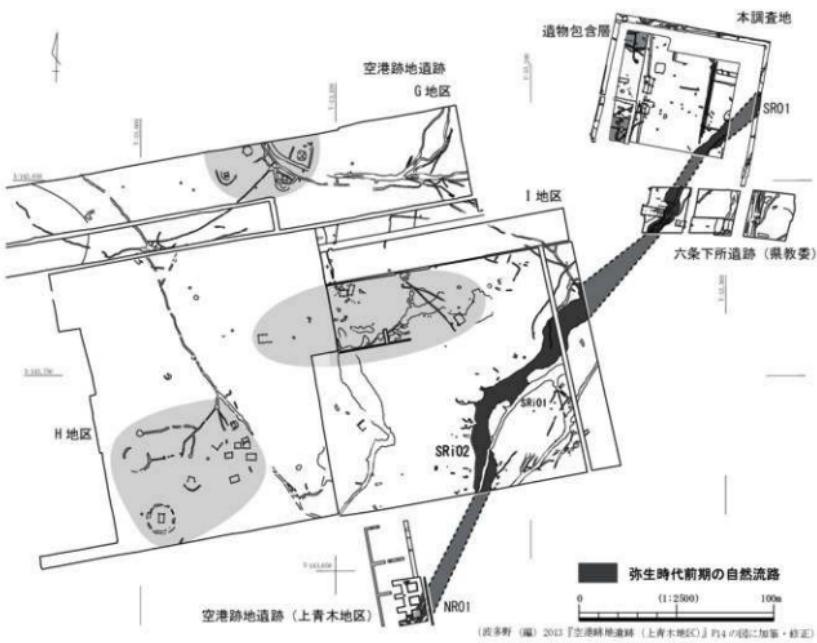
南から北東に向かい蛇行して流下する。一部、弥生時代後期中葉に所属するSRi01と重複する。上流部分では幅は10m、検出面からの深度は1m、下流部分では幅は12m、深度は0.3mである。下流部分で複数条に分岐しており、そのなかにはSRi01に合流する支流も存在する。出土遺物は弥生時代前期後半が大部分を占めるが、一部弥生時代後期から古墳時代に属するものが出土している。このため弥生前期後半には利用されており、一部は古墳時代まで継続して利用されていた可能性がある。

SR101は深度が浅く幅広の流路である。途中で消滅する。上流部分では幅は1.5m、検出面からの深度は0.6mであるが、下流では幅は5.5～1.6m、深度は0.5～0.3mである。出土遺物から弥生時代後期中葉に所在する。

六条下所遺跡（県教委）自然流路

遺物は縄文時代のサヌカイト片のみであり、詳細な時期は不明である。埋没単位は未報告のため詳細は不明であるが、試掘調査の結果では、大きく2条に分かれていることが判明している。しかし、本調査の平面図では複数の溝ないし流路が重複しているようである。この内、西側は側面が急斜面のため、人工的な掘削を伴う遺構と判断されている。

以上をまとめると今回の発掘調査で検出したSR01は、弥生時代前期後半には開削され、弥生時代後期後半～古墳時代前期には埋没し、SR01埋土上にも遺構が展開する。幅は6～12mの広さを有するが、深度は浅く1.0～0.39mである。場所により、複数条に分岐し蛇行して流下しており、本調査地の南側に隣接する県教委による発掘や、SR01南側では少なくとも2時期の埋没単位を確認して



第29図 本調査地周辺の自然流路配置図

いる。県教委の試掘調査では1条は人工的な掘削の可能性があげられていたが、SR01南側（A断面）で確認した2時期の埋没単位うち、西側はその可能性がある。しかし、北側（B断面）では東側の流路が広がり、西側の流路は削られている可能性があり、明確な埋没単位は確認できなかった。

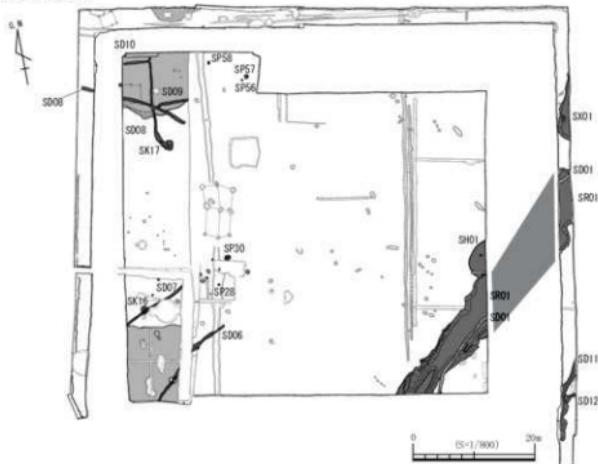
のことから、弥生時代前期後半以降はSR01が開削され、遺物包含層が堆積する等、居住域としては不安定な場所であったと考えられる。これを裏付けるように、自然流路から離れた西側の空港跡地遺跡では、弥生時代後期中葉に居住城が展開するが、本調査地では弥生時代前期以降の遺構・遺物は皆無である。

古墳時代前期

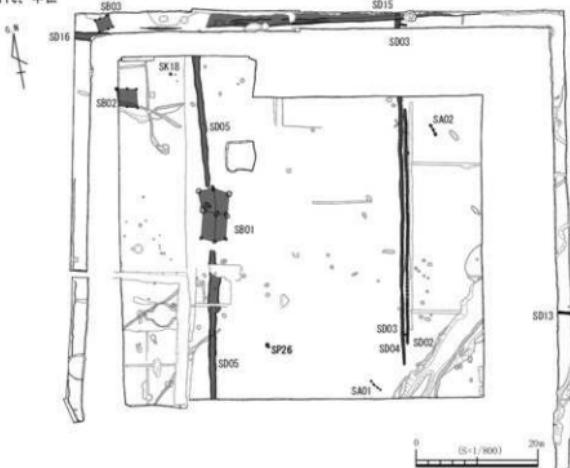
検出した遺構は溝5条、土坑2基、ピット2基である。遺構の分布は調査地西側に偏っている。溝は前述した遺物包含層上面で検出しており、遺物包含層の形成は当該期には終了したと考えられる。調査区基礎部分西側の遺物包含層付近では土坑を2基検出しており、中でもSK16は廃棄に伴う土坑と考えられ、残りの良い遺物が多数出土した。また、SP28やSP30付近では埋土が似ているピットを多数検出したため、居住域が広がっていた可能性が高い。

溝は詳細な年代は不明だが、埋土の特徴や重複関係から少なくとも弥生時代～古墳時代に所属する遺構として、SD01、SD06、SD07、SD11を検出した。いずれも主軸方位が条里地割に沿わずSR01とほ

弥生時代、古墳時代



古代、中世



第30図 六条下所遺跡構造変遷図

ほぼ同じであり、旧地形に沿った方向と考えられる。このうちSD07が古墳時代前期に所在するSK17を切っており、遺構の規模や埋土が似ていることから、他の溝もSD07と同様に古墳時代前期以降に開削されたと考える。周辺の調査成果を概観すると、空港跡地遺跡I地区や空港跡地遺跡上青木地区、六条下所遺跡（香川県教育委員会2017）でも、主軸方位や規模が同程度の溝が検出されている。

古代

検出した遺構は古代後半頃の掘立柱建物 1 棟 (SB01) と、SD03 から 7 世紀後葉以降に属する遺物が出土している。周辺の既往の発掘調査結果でも、当該期は遺構遺物が非常に少なく土地利用の実態は不明である。また、詳細な年代は不明であるが、条里地割に沿う溝を 2 条 (SD02、SD03) 検出している。

中世

検出した遺構は掘立柱建物 2 棟、溝 3 条、土坑 1 基である。また、古代～中世に所属する遺構は柵列 2 基、ピット 1 基である。掘立柱建物 (SB02、03) は 2 間 × 1 間の 小規模な建物であり、調査区北西側で検出した。周囲に別の遺構は少なく、柵や溝等の区画施設は確認できない。また、掘立柱建物や柵列が密集するような様子は確認できない。掘立柱建物のうち SB03 は SD16 を切り込むことから、14 世紀初頭以降と考えられる。溝は恐らく全て条里地割に沿う溝 (SD05、SD15、SD16) である。特に SD15 は深度が浅いものの、幅が 2.9 m 以上と規模が大きい。第 2 節で詳細を記述するが、里界溝の可能性がある溝である。

周辺の調査では、第 II 章 2 節で既述したように、11 世紀中葉から区画を持つ建物群と、その周囲に小規模な建物群が散在する状態が展開する。前者は空港跡地遺跡 F 地区と G 地区であり、後者はその他の遺跡である。本調査地で検出した掘立柱建物も区画を持たないことから後者にあたると考えられる。また、中世段階には広範囲に条里地割に沿う区画溝が開削されていることが明らかになっており、本調査地も同様の状況を確認できる。

以上のことから本調査地の調査成果は、特に本調査地周辺の弥生時代前期から中世後半の集落動向を理解する場合に、重要な成果と位置付けられる。

参考文献

- 香川県教育委員会編 1998『空港跡地遺跡整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 3 冊 空港跡地遺跡Ⅲ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・香川県土地開発公社
香川県埋蔵文化財センター編 2016「六条下所遺跡」『埋蔵文化財試掘調査報告 XXVII 平成 26 年度香川県内遺跡発掘調査』香川県教育委員会
香川県埋蔵文化財センター編 2017「六条下所遺跡」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 27 年度』香川県教育委員会
高松市教育委員会編 2013『空港跡地遺跡（上青木地区）』高松市埋蔵文化財調査報告第 149 集

第2節 条里地割の復元について（第31図）

第2、第4調査区で東西方向に延伸するSD15が確認され、調査当初から条里地割に沿う溝と推測されていた。条里地割の復元図と調査地と比較した図面が第31図であり、位置関係が近接していることから条里地割に伴う溝と考えられ、調査位置は6条10里32坪に位置していると考えられる。SD15は6条10里32坪と6条11里5坪の里界溝と考えられる。一方で、復元された条里地割の東西方向の傾きはN-80°-Wに対し、今回検出した溝の傾きがN-82°-Wで誤差の範囲と考えられるが、これまで示された方位と若干異なる。また、溝は削平を受けている可能性はあるが、約0.3mの深さと浅めである。当時の行政区画として設定されたものとしては貧弱な印象を受ける。

そこで、遺構の規模等を周辺の調査例で検証したい。空港跡地遺跡では条里地割に沿った坪界溝や里境溝を検出しており、調査成果に基づく条里地割の復元を行っている（木下・三辻2002）。その内近隣で里界と考えられる溝で当遺跡のSD15と同時期に埋没と考えられるSD126は幅0.6mで深さ0.1mである。江戸時代の埋没であるが、坪堀と考えられるSD141は幅1.5～4.5mで深さ約0.3～0.9mである（森下・白石1998）。他の条里地割に関する溝跡の規模も幅や深さは一律ではなく、個々に異なる傾向にある。深さに関しては約0.1～0.5m台のものが多くみられ、今回検出した溝も土地境に成りうる深さであることが分かる。

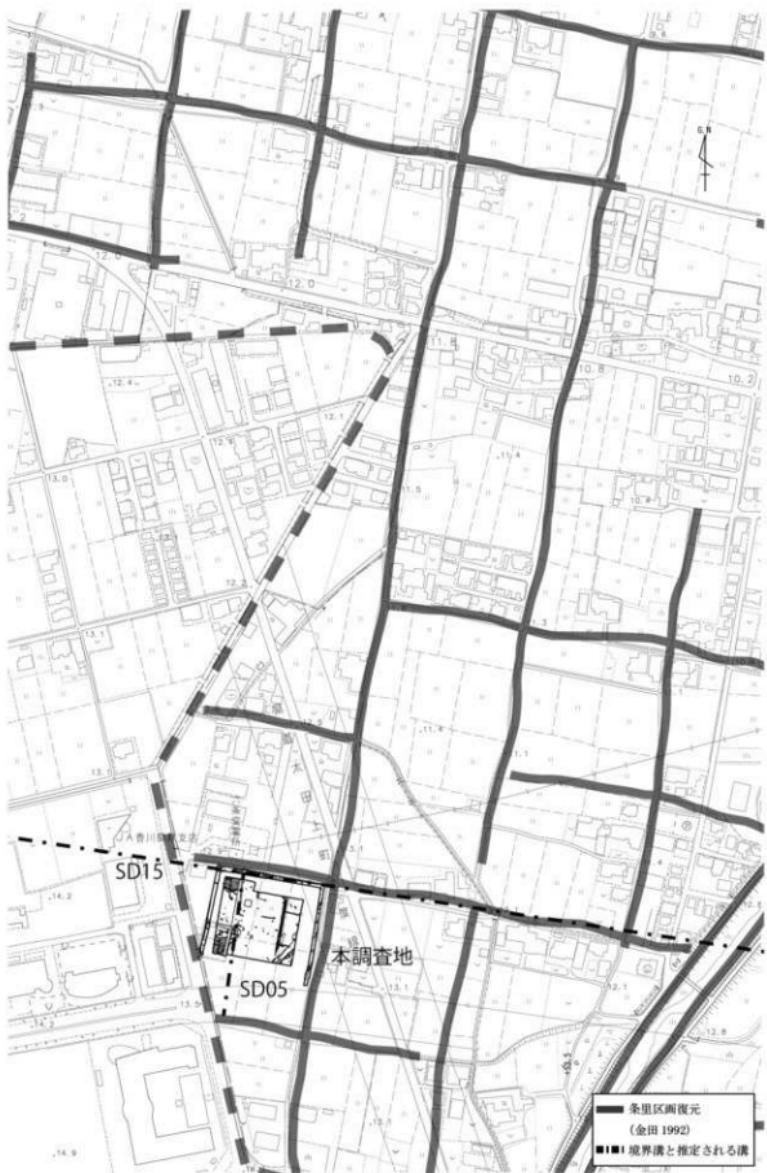
以上の点から復元図と検出位置の整合性と遺構の規模から六条下所遺跡で検出したSD15は6条10里32坪の北側里堀溝と考えられる。これまでの研究で想定された傾きと検出した傾きが若干異なることについては局所的な角度の変化によるもの等の可能性について今後の発掘調査事例の増加等によって検証は行う必要がある。

また、SD05は削平されているが、SD15と直角に交差することやSD05から出土遺物はないが、SD015とほぼ同一の土質であることから、連鎖的な関係にあると推測される。関連性を検討すると復元図の坪境から40～50mと条里制で施行される1町四方（一辺109m前後）のほぼ中間にSD05が位置することから坪界溝になる可能性は低いと考えられる。一方で、発掘調査に基づく条里地割の復元（森下・白石1998）には1町四方の坪区画を四等分にする細かい坪地割が設けられており、SD05はこのような坪地割に伴う溝と推測される。また、SD05と並行する関係にあるSD02・03は、坪地割に伴う溝の可能性もあるが、SD05の土質と比較すると大きく異なる。SD02・03が坪地割に関係し埋没時期が異なるかどうか、坪地割に関連しない溝のかなは今回の調査では明らかにすることはできなかつた。

以上のように、今回の調査ではSD15が6条10里32坪と6条11里5坪の里界溝であることが明らかになった。また、SD05は坪地割に伴う溝の可能性が推測される。一方で金田氏が指摘する溝の傾きが若干異なる点等の新たな課題もあり、今後の発掘調査成果等でその原因を明らかにすることでより詳細な高松平野の条里地割の施工状況を明らかにできると考えられる。

参考文献

- 金田草裕 2000 「高松平野における条里地割の形成」『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』高松市教育委員会
木下晴一 2002 「第5章 まとめ」『空港跡地遺跡整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 空港跡地遺跡V』香川県教育委員会
森下友子・白石純 1998 『空港跡地遺跡整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 空港跡地遺跡III』香川県教育委員会



第31図 本調査地周辺の条里地割復元図

第1表 ピット観察表

報告番号	面積 (m ²)			平面形状	土色	出土遺物	切り合い関係
	長軸	短軸	深さ				
SP01	0.71	0.44	0.11	楕円形	10YR6/2灰黄 細粒砂		
SP02	0.59	0.53	0.04	楕丸方形	10YR5/3 にぶい黄褐 細粒砂		
SP03	0.56	0.52	0.04	円形	10YR5/3 にぶい黄褐 細粒砂		
SP04	0.37	0.21	0.12	楕円形	断面図参照		
SP05	0.31	0.22	0.11	楕円形	断面図参照		
SP06	0.14	0.13	0.06	円形	10YR5/3 にぶい黄褐細粒砂 Mn5%含む		
SP07	0.25	0.23	0.16	円形	10YR4/3 にぶい黄褐細粒砂質レッド 地山ブロック3%含む		
SP08	0.45	0.37	0.17	円形	断面図参照		
SP09	0.36	0.34	0.16	円形	2.5S5/2 灰灰黄 中粒砂混じりシルト 灰色砂粒25%, 3cm程度の石30%含む		
SP10	0.41	0.40	0.05	円形	2.5S5/2 灰灰黄 中粒砂混じりシルト 灰色砂粒25%, 3cm程度の石30%含む		
SP11	0.42	0.37	0.08	円形	2.5S5/2 灰灰黄シルト混じり細粒砂 褐色E20%程度含む		
SP12	0.54	0.45	0.11	円形	2.5S5/2 灰灰黄シルト混じり細粒砂 灰色E20%程度含む		
SP13	0.56	0.48	0.15	円形	2.5S3/3 嗅オリーブ褐色細粒砂質シルト こぶし大粒40%程度含む		
SP14	0.70	0.59	0.1	楕丸方形	2.5S4/3 オリーブ褐色細粒砂 Mn5%程度含む		
SP15	0.18	0.17	0.05	円形	10YR4/2灰黄褐 細砂		
SP16	0.36	0.30	0.1	楕円形	10YR5/2 黒褐色シルト混じり細粒砂		
SP17	0.26	0.27	0.1	円形	10YR4/2灰黄褐 細砂		
SP18	0.33	0.26	0.15	円形	10YR4/3 にぶい黄褐 細砂 5%地山ブロック含む	SP19との切り合い不明	
SP19	0.56	0.44	0.17	楕円形	10YR4/3 にぶい黄褐細粒砂	SP20との切り合い不明	
SP20	0.99	0.76	0.07	楕円形	10YR4/3 にぶい黄褐中粒砂		
SP21	0.36	0.33	0.04	円形	10YR5/3 にぶい黄褐 細粒砂 灰色ブロック5%含む		
SP22	0.63	0.51	0.19	楕円形	断面図参照		
SP23	0.42	0.33	0.18	半円形	断面図参照		
SP24	0.66	0.64	0.13	楕丸方形	注記なし		
SP25	0.62	0.56	0.13	円形	10YR4/4 黄褐色砂		
SP26	0.68	0.5	0.15	不整形	断面図参照		
SP27	0.68	0.66	0.16	円形	断面図参照	上器片	
SP28	0.45	0.35	0.1	楕円形	断面図参照	上部器皿(40) 垂(40)	SP29に切られる
SP29	0.67	0.57	0.16	円形	断面図参照		
SP30	1.04	0.81	0.19	楕円形	断面図参照	上部器皿(50)	
SP31	0.41	0.30	0.17	楕円形	断面図参照		後且に切られる
SP32	0.42	0.31	0.19	楕円形	断面図参照		後且に切られる

報告書号	規格 (a)			平面形状	土色	出土物	切り合い関係
	長軸	短軸	深さ				
SP33	0.63	0.58	0.31	円形	断面図参照	上部器片	複数に切られる
SP34	0.75	0.70	0.2	楕円形	注記なし		
SP35	0.29	0.26	0.14	円形	断面図参照		
SP36	0.32	0.30	0.1	円形	10YE4/3 増根細粒砂	上部器片	
SP37	0.47	0.24	0.21	半円形	断面図参照		
SP38	0.67	0.47	0.14	楕円形	断面図参照		
SP39	0.29	0.23	0.13	円形	断面図参照		
SP40	1.12	0.55	0.14	楕円形	10YE4/2 底黄褐色細粒砂		
SP41	0.22	0.18	0.09	円形	10YE3/3暗褐色 細砂		
SP42	0.35	0.32	0.08	円形	10YE4/4褐色 細砂		
SP43	0.37	0.33	0.09	円形	10YE3/2暗褐色 細砂		
SP44	0.29	0.18	0.08	円形	10YE3/3暗褐色 細砂		
SP45	0.25	0.23	0.09	円形	10YE4/3に底へ黄褐色 細砂		
SP46	0.25	0.23	0.1	円形	10YE3/3暗褐色シルト質細粒砂		
SP47	0.21	0.17	0.05	円形	10YE3/3暗褐色 細砂		
SP48	0.32	0.27	0.08	円形	10YE4/3に底へ黄褐色 細砂		
SP49	0.26	0.23	0.12	円形	10YE3/2暗褐色 細砂		
SP50	0.54	0.48	0.1	円形	断面図参照	上部器片	
SP51	0.29	0.29	-	円形	10YE3/3暗褐色 細砂		
SP52	0.36	0.31	0.1	円形	10YE4/3に底へ黄褐色 細砂		
SP53	0.27	0.24	0.12	円形	10YE3/3暗褐色 細砂	上器片	SP55を切る
SP54	0.80	0.51	0.2	楕円形	断面図参照	上器片	SP55とセット関係か
SP55	0.64	0.38	0.29	楕円形	断面図参照	上器片	SP54とセット関係か
SP56	0.30	0.26	0.07	楕円形	10YE4/2 黒褐色シルト		
SP57	0.65	0.61	0.09	円形	10YE3/2 黑褐色シルト		
SP58	0.53	0.36	0.07	楕円形	10YE4/2黒褐色 シルト混じり細粒砂		
SP59	0.20	0.20	-	円形	10YE4/2底黄褐色 細砂	上部器片	
SP60	0.32	0.18	0.06	楕円形	断面図参照		
SP61	0.35	0.30	0.08	円形	注記なし		
SP62	0.18	0.15	0.2	円形	注記なし		
SP63	0.28	0.29	0.13	楕円形	注記なし		
SP64	0.36	0.34	0.11	円形	10YE3/4暗褐色 シルト質細粒砂		

第2表 出土遺物觀察表

調査 番号	測定 基準 高さ	測定・辺り名	種類	断面	測定 方法 〔得失法、△差定法〕	手法の特徴		色調	地土	性質	備考
						外基/芯面	内基/芯面				
28	72	第3調査区 南西	石器	石器	高さ 2.5 幅 1.56 厚さ 0.34 重量 0.81	-	-				石材: サスカイト
28	72	第1調査区 東側南斜 面	植物倒壊	口被形	口径 - 底径 - 壁厚 [1.5]	アーチ: ホコナデ、草茎、 苔類	深成	[地上] D7/2灰黄 [地下] 綠色	粘土		

写真図版

写真図版目次

- 図版 1 1 第1調査区南西側全景写真（北から） 3 SX04 完掘状況（北から）
 2 第3調査区北西側全景写真（東から） 4 作業風景
- 図版 2 1 第3調査区北西部分（東から） 図版 12 1 SH01 出土遺物
 2 第5調査区（南から） 2 SB01～03, SD15, SD16 出土遺物
- 図版 3 1 SH01 検出状況（南西から） 図版 13 1 SR01 出土土器①
 2 SH01 断面（南西から） 2 SR01 出土土器②
- 図版 4 1 SH01 完掘状況（南西から） 図版 14 1 SK17, SP28, SP30 出土遺物
 2 SB03 完掘状況（東から） 2 SK16 出土遺物①
- 図版 5 1 SR01 A 断面（南西から） 3 SK16 出土遺物②
 2 SR01 第1調査区部分完掘状況（北東から） 4 SK16 出土遺物③
- 図版 6 1 SD02・03 A 断面（南から） 5 SK16 出土遺物④
 2 SD02・03 D 断面（南から） 図版 15 1 SK16 出土遺物⑤
 3 SD03 E 断面（北から） 国版 16 1 遺物包含層1 出土遺物①
 4 SD02・03第1調査区部分完掘状況（南から） 2 遺物包含層1 出土遺物②
 3 SD05 南側完掘状況（南から） 3 遺物包含層2 出土遺物
 2 SD05 B 断面（南西から） 4 SK21, 重機掘削時出土遺物
- 図版 8 1 SD15 東側完掘状況（西から） 5 出土遺物（石器）表
 2 SD15 A 断面（西から） 6 出土遺物（石器）裏
- 図版 9 1 SD08 完掘状況（南西から）
 2 SK17 完掘状況（西から）
 3 SK17 遺物出土状況（西から）
- 図版 10 1 SK16 遺物出土状況①（東から）
 2 SK16 遺物出土状況②（東から）
- 図版 11 1 SX01 A 断面（南西から）
 2 SX01 B 断面（南から）



1 第1調査区南西侧全景写真（北から）



2 第3調査区北西侧全景写真（東から）



1 第3調査区北西部分（東から）



2 第5調査区（南から）



1 SH01 検出状況（南西から）



2 SH01 断面（南西から）



1 SH01 完掘状況（南西から）



2 SB03 完掘状況（東から）



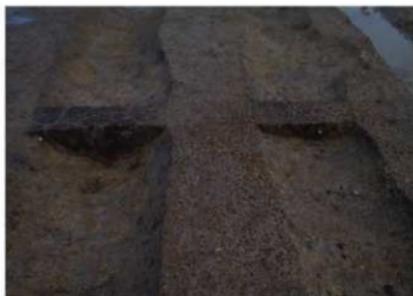
1 SR01 A断面（南西から）



2 SR01 第1調査区部分完掘状況（北東から）



1 SD02・03 A断面（南から）



2 SD02・03 D断面（南から）



3 SD03 E断面（北から）



4 SD02・03 第1調査区完掘状況（南から）



1 SD05 南側完掘状況（南から）



2 SD05 B断面（南西から）



1 SD15 東側完掘状況（西から）



2 SD15 A断面（西から）



1 SD08 完掘状況（南西から）



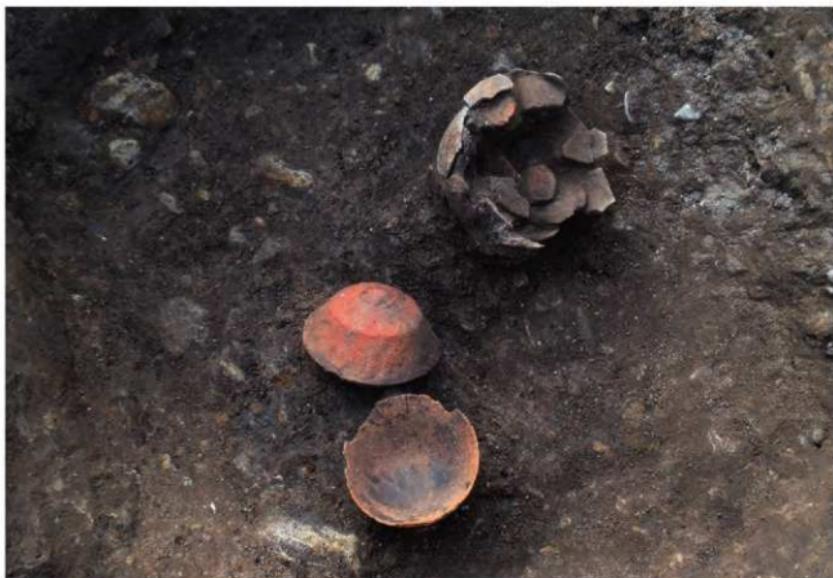
2 SK17 完掘状況（西から）



3 SK17 遺物出土状況（西から）



1 SK16 遺物出土状況①（東から）



2 SK16 遺物出土状況②（東から）



1 SX01 A断面（南西から）



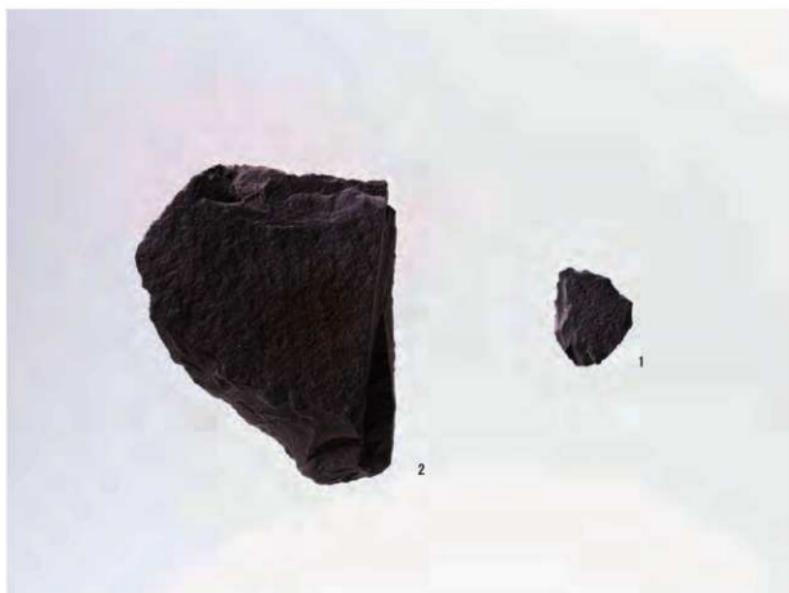
2 SX01 B断面（南から）



3 SX04 完掘状況（北から）



4 作業風景



1 SH01 出土遺物



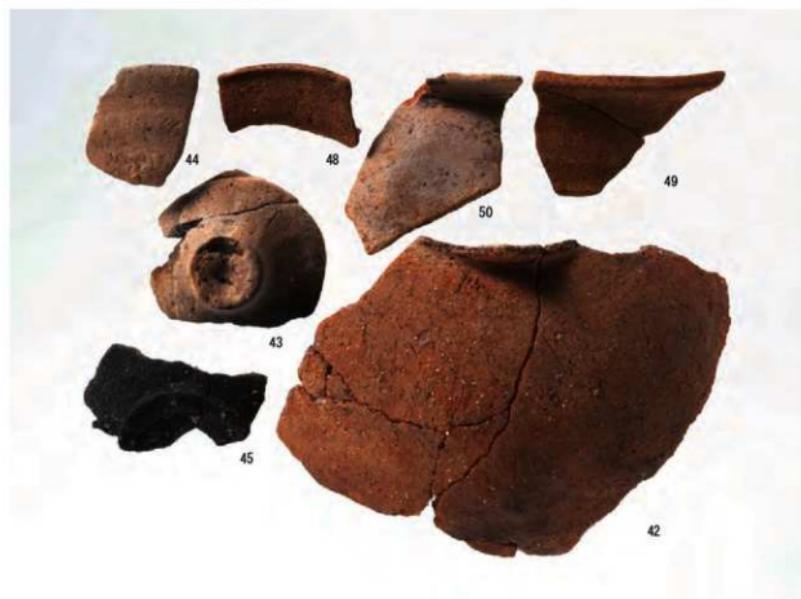
2 SB01 ~ 03, SD15, SD16 出土遺物



1 SR01 出土遺物①



2 SR01 出土遺物②



1 SK17, SP28, SP30 出土遺物



36



38

2 SK16 出土遺物①



32

3 SK16 出土遺物②

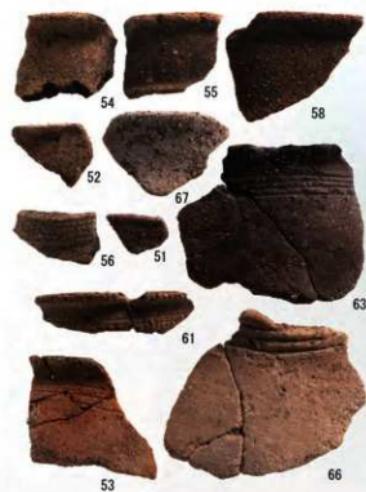


37

4 SK16 出土遺物③



1 SK16 出土遺物⑤



1 遺物包含層Ⅰ出土遺物①



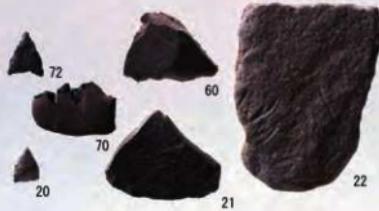
2 遺物包含層Ⅰ出土遺物②



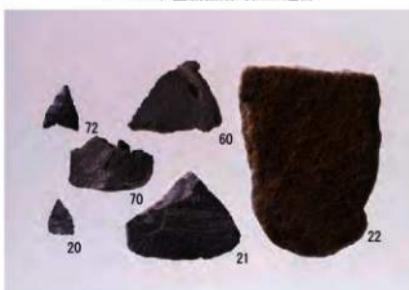
3 遺物包含層Ⅱ出土遺物



4 SK21、重機掘削時出土遺物



5 出土遺物(石器)表



6 出土遺物(石器)裏

報 告 書 抄 錄

高松市新設第二学校給食センター（仮称）建設工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

六条下所遺跡

令和2年3月31日

編 集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
発 行 高松市教育委員会
印 刷 (有) 中央ファイリング